



学校法人中越学園

長岡大学

令和3年度 学生による地域活性化プログラム

石川英樹ゼミナール 活動報告書

栃尾地区活性化に向けた にぎわい創出事業: にぎわい創出プロジェクト

～布の森 in 白昼堂堂～



01

令和3年度

ごあいさつ



長岡大学 学長 村山 光博

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」は、3、4年次の専門ゼミナールに所属する学生グループが、地域課題の解決や地域の魅力創出に向けた調査研究と具体的な活動を行うことにより、学生の職業人としての基礎的能力向上と地域活性化への貢献を同時に目指すプログラムです。本プログラムは2007（平成19）年度に導入してから、これまで十数年に渡り継続しながら発展してきた本学の特徴的な教育プログラムの一つであります。最近、取り組みの中心でもある地域の現場における学生の諸活動を新聞やテレビ、ラジオ等のメディアでも取り上げていただく機会も増えてきました。また、これまで本プログラムの運営に多大なるご支援ご協力をいただいていた地域連携アドバイザーをはじめ地域の皆様から、これらの取り組みに対する激励のお言葉をいただいております。長きにわたりこの取り組みを続けて来られたのは、ひとえに地域の皆様の暖かいご支援とご指導の賜物と、心より感謝申し上げます。

「地域活性化とは」という問いに対する明確な答えを述べることはなかなか難しいのですが、本プログラムでは、答えのない様々な地域課題に対して、それら課題の原因をどのように捉え、どのように行動を起こして対応していくのかについて、学生が自ら体験することができます。卒業後には地域社会の一員となる学生たちが、将来、各職場や地域コミュニティの中にあるそれぞれの地域課題に取り組むことになる考えると、これらの体験は彼らにとって大変貴重なものとなることでしょう。

本プログラムでは、各ゼミナールで設定したテーマの下で学生グループが活動を進めていくこととなりますが、時には一緒に活動する学生同士のちょっとしたすれ違いや地域の大人たちとの意見の食い違い等も起きることがあります。このような体験も学生がさらに一歩、人として成長するためのきっかけとなります。各グループで決めたテーマをまとめ上げるために、どのように他者と協力しながら取り組みを進めていくべきなのか、このグループの中での私の役割は何か、などを考えながら活動を行っていくことで、グループで活動することの難しさだけでなく、グループで目標に向かって何かをやり遂げることの充実感や達成感を味わうことができます。

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」では、学生が地域に飛び込んで地域の皆様と一緒に汗をかき、楽しみ、そして考える中から、目先の地域貢献活動だけでなく、将来にわたって地域の活性化を担っていく事のできる人材の育成を目指しております。本学の建学の精神は、「幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進」と「地域社会に貢献し得る人材の育成」です。本プログラムは、まさにこの精神を実現するための中核となる教育プログラムであると言えます。

本活動報告書は、各取組テーマの調査研究活動の概要とその成果について学生が執筆した報告書を集めて一冊にまとめたものです。ぜひご一読いただければ幸いです。

なお、本プログラムは「NaDeC 構想推進コンソーシアム産学協創ワーキング」から補助をいただいたことを申し添えます。

2022年3月



長岡大学は、文部科学大臣の認証を受けた『公益財団法人日本高等教育評価機構』により、平成28年度大学機関別認証評価を受審し、平成29年3月7日、日本高等教育評価機構が定める大学評価基準を満たしていると「認定」されました。

はじめに

〔にぎわい班〕

栃尾地区活性化に向けたにぎわい創出事業： にぎわい創出プロジェクト ～布の森 in 白昼堂堂～



長岡大学教授／ゼミ担当教員 石川 英樹

石川ゼミでは、令和元（2019）年度以来、栃尾地区を活動フィールドとした地域活性化を題材とした PBL（Problem / Project Based Learning）に取り組んできた。今年度は、栃尾でのにぎわい創出を目指す「にぎわい班」と、域内外に対する栃尾地区のPRを目指す「PR班」の2チームに分かれ活動を進めた。そのうち「にぎわい班」の活動成果を取りまとめたのが本報告書である。

「にぎわい班」の活動は、昨年度の「空き家（活用）班」の活動を引き継いで大きく発展させた取り組みとなった。昨年度の「空き家班」は雁木通りの空き家改修によるギャラリー白昼堂堂の創設プロジェクトと、同ギャラリーでの錦鯉のミニ・アクアリウム開催に取り組んだ。それに対して、本年度の「にぎわい班」の取り組みは、白昼堂堂における栃尾繊維と長岡錦鯉によるインスタレーション（空間芸術）の展示という全く未知の領域の活動だった。そもそも白昼堂堂は栃尾の地域ブランディング構想の一環として、にぎわいづくりの拠点の役割を担う目的で創設された。「にぎわい班」は魅力的なイベント開催により、白昼堂堂の拠点性向上への寄与を目指した。

今回のイベントには、錦鯉の調達と展示だけではなく、大量の栃尾繊維の入手、またギャラリー全体を装飾する膨大な作業を伴い、昨年度を遙かに超える事業規模となった。その分、多くの活動資金も必要とされ、それを公的な補助金申請で調達するという、これまた未経験の取り組みにチャレンジすることになった。

振り返ると、「にぎわい班」の今年度の活動は、ゼミ授業の範囲を大きく超えるプロジェクトだったと強く感じる。ゼミ生の授業時間外の出張は5月～11月で計50回を超え、とりわけイベント直前には会場準備で数日間泊まり込み作業もした。完成した本報告書をあらためて読み直すと、紙面の制約によって書き切れずに溢れてしまった取り組み項目が数多くあることに気づく。それだけ膨大な取り組みだったのである。

そうした中では様々な失敗やトラブルも生じ、個々のゼミ生が厳しい状況に陥る機会は少なくなかった。それらの経験も含めて、本年度の「にぎわい班」メンバーはプロジェクト管理や地域ブランディングに関する学びを深めたのは当然として、社会人基礎力を大いに向上させたと思う。今年度のゼミ活動で身につけた様々な成果を、必ずや卒業後のキャリアに活かしてくれると信じている。

2022年3月

石川英樹
ゼミナール

栃尾地区活性化に向けたにぎわい創出事業にぎわい創出プロジェクト～布の森 in 白昼堂堂～



【参加学生】 10名(4年生5名、3年生5名)

4年 金子 響 小泉日和 永田藍美 山本紘也 米山和成

3年 磯部直樹 上村月乃 野澤侑我 星野宇宙 山本まりあ

【アドバイザー】

オオタケコウスケ デザイン事務所オフィス 代表 大竹幸輔 氏

長岡市栃尾支所地域振興課 地域おこし協力隊員 加治聖哉 氏

目標： 栃尾地区の交流人口の増加による活性化

【取組】「杜々の森×錦鯉×栃尾繊維」融合のインスタレーション 『布の森』の展示@白昼堂堂

- ・栃尾の貴重な自然資産「**杜々の森名水公園**」の危機(行政の管理体制の縮小・消滅)
⇒インスタレーション(空間芸術)のテーマにとりあげてPR。
- ・イベントで域内外の地域資源のPR……**栃尾繊維**、**二十村郷の錦鯉**
- ・魅力あるイベント開催で「**白昼堂堂**」の拠点性向上、地域ブランディングの促進
⇒雁木通りを中心に栃尾のにぎわいの創出へ



「布の森」開催
(2021/10/23～31)



【地域との連携】

- ・ALL栃尾の祭典「**栃尾縁日**」での共同開催
……栃尾の様々な地域活動団体と連携強化

【地域資源の長期的PRに向けて】

- ・「布の森」終了後に、錦鯉・栃尾繊維を希望者に無償譲渡。市民に長く接してもらう

※来場者数 1,152人

栃尾地区活性化に向けたにぎわい創出事業：
にぎわい創出プロジェクト～布の森 in 白昼堂堂～

石川ゼミナールⅢ・Ⅳ（にぎわい班）

18K086	永田	藍美	（リーダー）
18K029	金子	響	（副リーダー）
18K039	小泉	日和	
18K112	山本	紘也	
18K117	米山	和成	
19K010	磯部	直樹	
19K027	上村	月乃	
19K086	野澤	侑我	
19K098	星野	宇宙	
19K110	山本	まりあ	

令和4（2022）年1月

目 次

1. 石川ゼミナール「にぎわい班」の紹介	1
1.1 にぎわい班メンバー	1
1.2 活動目的・基本コンセプト	1
1.3 活動概要	3
2. 取り組み内容の検討	4
2.1 テーマ検討～杜々の森に注目	4
2.2 「杜々の森」フィールドワーク	5
3. イベント構想までの準備	5
3.1 織物工業組合様への訪問	5
3.2 おりなす訪問	6
3.3 錦鯉の活用に向けて	7
4. 「杜々の森×錦鯉×栃尾繊維」を融合したイベントの決定	8
4.1 インスタレーションによる布の森を表現	8
4.2 インスタレーションの基本構想	9
5. 栃尾縁日へのイベント参加	9
5.1 「栃尾縁日」開催の情報獲得と開催日の決定	9
5.2 目標値の設定	10
6. 補助金申請への挑戦	10
6.1 活動資金の調達～補助金申請に向けて「ふれとち」発足	10
6.2 苦心した申請手続き	11
6.3 審査会でのプレゼンテーションを経て補助金獲得へ!	12
6.4 イベント終了後の実施報告書の作成、ふりかえり	13
7. 協賛金獲得の活動	14
8. 栃尾繊維の獲得	15
9. 錦鯉の手配と受け入れなどの準備	16
9.1 水槽の借用	16
9.2 錦鯉取引業 周社長へのヒアリング	16
9.3 錦鯉提供を決定いただく最終段階での失敗	18
9.4 錦鯉の保管場所の問題発生!～長岡大学での展示で乗りきる	19
9.5 錦鯉移動の梱包へのチャレンジ	21
10. 栃尾高校との高大連携	21

11. イベント後の錦鯉・栃尾繊維の活用	23
11.1 錦鯉の譲渡の準備	23
11.2 錦鯉飼育のマニュアル作成	24
11.3 栃尾繊維の譲渡の準備	24
12. 広報への取組	26
12.1 取り組み概要	26
12.2 チラシの計画から配布まで	26
12.3 ウェブサイトを利用した広報	30
12.4 SNSによる広報活動	32
12.5 展示イベントの広報パネルの作成	34
12.6 地域の広告媒体を利用した広報など	36
12.7 TV放映による地域活性化プログラムの広報	36
13. 会場準備作業	37
13.1 作業の事前の準備・相談	37
13.2 イメージの具体化に向けて	38
13.3 準備作業の体制確認、資材購入、創作作業の開始	38
13.4 展示の最終調整と完成に向けた時間との争い	42
14. イベント当日	43
14.1 イベント当日の概要	43
14.2 会場での取組	43
14.3 イベント開催期間中に注意した点	44
14.4 イベント開催期間中の気づき	46
15. イベント終了後の片付け・撤収	46
15.1 鯉の引き渡し作業	46
15.2 布の受け渡し作業	47
15.3 撤収作業の内容など	48
16. 今年度の活動の振り返り	48
16.1 概要	48
16.2 主な取組成果	49
16.3 反省点	49
16.4 来年度の活動に向けて	51
16.5 終わりに	51

1. 石川ゼミナール「にぎわい班」の紹介

1.1 にぎわい班メンバー

私たち「にぎわい班」は4年生5名、3年生5名の計10名で構成される。昨年度開催した雁木通りギャラリー白昼堂堂でのミニ・アクアリウム「昼想夜夢～二十村郷の変わり鯉～」の企画メンバーに加え、昨年度の商品開発班の一部とアクアリウムに興味を持った3年生がグループを編成した。

石川ゼミナール全体では、「栃尾地区の交流人口の増加」という大きな目標を掲げている。理想的には定住人口を増やして過疎化に歯止めをかけることが望ましいが、国全体・新潟県全体で人口減が加速する中でその実現性は低い。そこで交流人口の増加を目指すのである。

その基本目標の下で、今年度の石川ゼミは「にぎわい班」と「PR班」の2グループに分かれ、私たちにぎわい班は、地域資源を活用した魅力あるイベントの企画・実施によるにぎわい創出を取組テーマに掲げた。なお、アドバイザーとして昨年度から引き続きデザイン事務所代表の大竹幸輔様、さらに新たに長岡市地域おこし協力隊員の加治聖哉様にご指導頂いた。

1.2 活動目的・基本コンセプト

私たちは、昨年度を取組を土台として、今年度何に取り組むべきかを検討した。昨年度は栃尾地区の中心市街地の雁木通りに位置する谷内（やち）通りにおいて、古民家をギャラリー「白昼堂堂」に改装するプロジェクトに参画した。このギャラリーは、単なる古民家改装事業として取り組まれたものではない。栃尾地区来訪者の回遊促進の拠点作りを目指したものだ。

栃尾地区には雁木通り、杜々の森、神社、城址、油揚店舗等、魅力ある名所が数多くある。それらの点を線でつなぐよう誘導できれば、栃尾地区全体としての魅力を一層アピールでき、来訪者を増やし交流人口の増加につなげていける。その拠点機能を担うべく開設されたのが白昼堂堂だった。

とはいえ、白昼堂堂が拠点となるには、そこで頻繁に魅力あるイベントが開催され、白昼堂堂そのものが多くの人を域内外から引きつけることが必要である。今年度は、そのために白昼堂堂での魅力あるイベント実施をめざしたのである。

同時に、私たちは栃尾の地域資源のPRにもつながるイベントを目指した。栃尾の魅力の1つは豊かな自然であり、その象徴でもある「杜々の森」に注目した（後述）。栃尾の伝統産物である繊維も取り上げたいと考えた。さらには、地政学的に栃尾と密接な関係にある山古志を中心とした「二十村郷」の地域資源である錦鯉を、昨年度に続いて活用して、ALL長岡による集客力の高いイベントの企画・実施を目指した。

アドバイザーの指導の下、4・5月にゼミで議論を重ね、その中で出た意見をもとに最終的に整理された事業コンセプトを、次ページにまとめた。

〔図表 1〕 石川ゼミ「にぎわい班」の取組コンセプトの整理

長岡大学地域活性化プログラム 石川ゼミ

にぎわい創出プロジェクト～布の森 in 白昼堂堂～ **コンセプトボード**

事業目的

栃尾地区の交流人口増加への寄与

必要要素	難易度と実現可能性
観光としての価値がある	▶ 地域資源の発掘と周知 ▶ 視点によっては可能 ▶ 実施案件
産業があり仕事で訪れる	▶ 産業の開発と就労人口 ▶ ほぼ不可能
そこにしかない物がある	▶ 商品の開発と粗利計算 ▶ 非常に困難

地域資源の発掘と周知

テーマの選定基準

主観的基準による選定 ▶ 自分たちのやりたい事 ▶ **自然や森林などを表現し地域をアピール**

環境的基準による選定 ▶ 地域が抱える問題や要望 ▶ **問題点の調査と抽出**

公共施設の相次ぐ閉鎖・もしくは廃止検討の懸念

行政による**杜々森の森名水公園**の廃止検討

- ・多くの地域住民の思い出の土地
- ・杉の原生林であり地域の神域
- ・日本名水 100 選に選ばれる

地域住民の杜々森再認識 ↔ 主観的目標との合致

交流人口増加への道筋

地政学上・歴史上の地域交流 ▶ 原点に立ち返り地域を俯瞰する

事実関係の調査による事業の必然性の成立

- ・隣接地域との地域交流を原点とし、当事業のアイコンと位置付ける
- ・杜々森周辺地域は山古志と同じ文化圏だったという歴史的事実
- ・山古志で有名な鯉は栃尾でも生産され、有名な昭和三色は栃尾原産

集客が望めるコンテンツである条件の抽出

市街地・錦鯉・アート・大規模イベント内イベント

市内で実施される大規模なイベント期間中に、市街地にあるギャラリー白昼堂堂にて、杜々森と、栃尾・山古志それぞれの錦鯉を活用したインスタレーションにより、SNS 映えする空間を演出する。



目標

地域住民による地域資源への期待と興味が高まり、
地域自らが観光資源として成長させるきっかけとなる

1.3 活動概要

今年度の私たちの活動は、昨年度までとは比べものにならないほどの負荷のかかる取り組みとなった。以下で詳しく説明するとおり、ギャラリー白昼堂堂における展示イベントは栃尾繊維と錦鯉を使ったインスタレーションに決定した。それには、大量の栃尾繊維を集めるとともに、昨年度同様に錦鯉を提供いただくことが必要となった。また、昨年度以上に大がかりなイベントで多くの資材が必要になることから、その活動資金をいかに調達するかも大きな課題となり、結果として補助金申請という未経験の取組も加わった。

そうして、私たちは頻繁に栃尾地区をはじめとするフィールドワークに取り組むことになった。以下、本報告書ではそれらの詳細を解説する。参考として、ゼミ生による出張の実績を下表にまとめた。

〔図表2〕「にぎわい班」メンバーの授業時間外の出張・フィールドワーク

連番	日付	場所・内容等	出張者
1	2021/5/25	栃尾繊維工業協同組合でのヒアリング	小泉、永田
2	2021/6/2	杜々の森名水公園の視察	米山
3	2021/6/6	杜々の森名水公園の視察、白昼堂堂・雁木の駅見学	金子、小泉、永田、上村、山本ま
4	2021/6/8	杜々の森名水公園の視察	山本紘、磯部
5	2021/6/9	杜々の森名水公園の視察	野澤、星野
6	2021/6/11	おりなす・紘の会ヒアリング	金子、山本紘
7	2021/7/1	長岡市錦鯉養殖組合ヒアリング	金子、小泉、永田、山本紘、山本ま
8	2021/7/20	栃尾高校での共同授業	金子、小泉、永田、米山、磯部、上村、野澤、星野、山本ま
9	2021/7/30	栃尾文化センターで栃尾縁日の打ち合わせ参加	磯部
10	2021/8/5	ながおか若者しごと機構での補助金相談	金子、小泉、永田
11	2021/8/5	石坂小学校・浦瀬小学校から水槽借用	野澤、星野
12	2021/8/28	ながおか若者しごと機構の補助金説明会参加	永田、上村
13	2021/9/1	栃尾織物工業協同組合への協力依頼	金子、永田
14	2021/9/2	球球貿易周社長ヒアリング	山本紘
15	2021/9/10	白昼堂堂の清掃と加治アドバイザーとの打ち合わせ	米山、山本紘
16	2021/9/15	栃尾商工会で武士俣事務局長と打ち合わせ	米山
17	2021/9/21	栃尾高校での共同授業	金子、小泉、永田、山本紘、米山、磯部、上村、野澤、星野、山本ま
18	2021/10/4	白昼堂堂で加治アドバイザーと打ち合わせ	金子、永田、山本ま
19	2021/10/4	長岡市教育委員会でチラシ配布許可申請	磯部
20	2021/10/5	岡南小学校から水槽借用	野澤、星野
21	2021/10/5	栃尾ロータリークラブ定例会で協賛依頼	米山、上村
22	2021/10/5	栃尾文化センターで栃尾縁日の打ち合わせ参加	磯部
23	2021/10/6	栃尾ライオンズクラブ定例会で協賛依頼	米山
24	2021/10/7	谷内通り視察	磯部
25	2021/10/12	長岡市錦鯉養殖組合で錦鯉を受け取り	野澤
26	2021/10/13	秋葉中、栃尾南小、栃尾東小でチラシ配布依頼	米山、磯部
27	2021/10/14	刈谷田中学校、上塩小学校、下塩小学校、東谷小学校でチラシ配布依頼	米山、磯部
28	2021/10/15	栃尾文化センターで栃尾縁日の打ち合わせ参加	磯部
29	2021/10/15	白昼堂堂で商店会に協賛依頼	米山

〔図表2〕「にぎわい班」メンバーの授業時間外の出張フィールドワーク（続き）

連番	日付	場所・内容等	出張者
30	2021/10/16	白昼堂堂で展示準備作業	金子、永田、山本紘、星野、山本ま
31	2021/10/17	白昼堂堂で展示準備作業	米山、磯部、上村、野澤
32	2021/10/18	白昼堂堂で展示準備作業	米山、磯部、上村、野澤
33	2021/10/19	白昼堂堂で展示準備作業	小泉、永田、山本紘
34	2021/10/20	白昼堂堂で展示準備作業	金子、永田、山本紘、磯部
35	2021/10/21	白昼堂堂で展示準備作業	金子、小泉、永田、米山
36	2021/10/22	白昼堂堂へ水槽移動と展示準備作業	金子、小泉、永田、米山、山本紘、山本ま
37	2021/10/23	白昼堂堂で布の森展開催	小泉、永田、山本紘、磯部、山本ま
38	2021/10/24	白昼堂堂で布の森展開催	金子、米山、磯部、上村、野澤、星野
39	2021/10/25	白昼堂堂で布の森展開催	磯部、上村
40	2021/10/26	白昼堂堂で布の森展開催	小泉、永田
41	2021/10/27	白昼堂堂で布の森展開催	金子、山本紘
42	2021/10/28	白昼堂堂で布の森展開催	金子、米山
43	2021/10/29	白昼堂堂で布の森展開催	山本紘、米山
44	2021/10/30	白昼堂堂で布の森展開催	米山、磯部、星野、山本ま
45	2021/10/31	白昼堂堂で布の森展開催と片付け	永田、山本紘、米山、磯部、野澤、星野、山本ま
46	2021/11/1	白昼堂堂で片付け、大学へ物資移動	金子、小泉、永田、米山、磯部、上村、野澤、山本ま
47	2021/11/2	白昼堂堂で片付け、大学へ物資移動	金子、小泉、永田、山本紘、米山、磯部、上村、野澤、星野、山本ま
48	2021/11/5	白昼堂堂で片付け完了、大学へ物資移動	磯部
49	2021/11/12	ながおか若者しごと機構への補助事業実施報告書提出	永田、磯部
50	2021/11/16	栃尾文化センターで栃尾縁日の打ち合わせ（振り返り）参加	磯部
51	2021/11/17	岡南小学校へ水槽返却	野澤
52	2021/11/18	ながおか若者しごと機構へ精算書類提出	小泉
53	2021/11/18	石坂小学校へ水槽返却	野澤、星野
54	2021/11/19	浦瀬小学校へ水槽返却	野澤、星野

（執筆担当）永田 藍美

2. 取り組み内容の検討

2.1 テーマ検討～杜々の森に注目

上記のとおり、昨年度の開設で参画したギャラリー「白昼堂堂」を活用することは早い段階から決まっていた。問題は、どのようなイベントを実施するかである。昨年度と全く同じイベントではなく発展型を目指した。

4～5月にゼミでそのアイデア出しの議論をする中、大竹アドバイザーから、長岡市による公共施設の維持管理計画のなかで、「杜々の森」の管理体制が縮小されつつあり、廃止される可能性もあるとの情報をいただいた。

「杜々の森」とは、正式名称を「杜々の森名水公園」と言い、昭和の名水百選に選ばれた文字通り清水が自慢の公園である。昔から飲み水や農業用水として地元の人から愛されてきた。筆者自身も小学生の時から校外学習やイベントなどで何十回も訪れた場所であり、

思い入れも強い。杜々の森の維持管理体制が縮小されるのは個人的にも悲しい。栃尾の豊かな自然を象徴する地域資源が失われることになり、地域全体の損失である。

そこで、今年度は栃尾の地域資源として「杜々の森」に注目して、それを何らかの形でにぎわい創出のためのイベントのテーマに取り上げられないかを検討することにした。

2.2 「杜々の森」フィールドワーク

ゼミ生のほとんどが旧栃尾市外出身者で、杜々の森の存在自体知らないという人が多かった。筆者自身も大学入学後は一度も行っていない。そうしたことから、全員によるフィールドワーク第一弾として、杜々の森を見学で訪れることにした。

〔図表 3〕 杜々の森の視察



〔図表 4〕 杜々の森「廃材水族館」



見学を終えた個人的な感想としては、湧き水や自然はそのままだが、園内施設の遊具や売店などの規模は縮小された印象だった。どこか寂れた雰囲気を感じた。このまま行政による管理が無くなっていくと、ますます荒れた状態になってしまうのではないか。

私たちのフィールドワークとちょうど同じ時期に、園内の施設「アトレとど」で加治聖哉アドバイザーのアート作品による「廃材水族館」という展示が行われていた。会場では、さっそく加治アドバイザーとお話しできた。

私たちは、この「杜々の森」のフィールドワークを通じて、今年度のイベントのイメージを固めていった。

(執筆担当) 米山 和成

3. イベント構想までの準備

3.1 織物工業組合様への訪問

私たちは、栃尾繊維を何らか活用したいというイメージを抱いていた。繊維業は栃尾地区の伝統産業である。昨年度、商品開発で「裂き織り」に取り組んだという活動経験も活かしたかった。

まず5月25日に栃尾織物工業組合様を訪問し、栃尾繊維に関するヒアリング調査とともに私たちの活動へのご協力依頼を行った。ヒアリングとしては、陶山様より栃尾の繊維

産業についての歴史を伺った。

栃尾ははた屋が盛んで、最盛期には 200 社以上存在したが、現在は 10 社と少なくなってしまう。昭和 59 年をピークに繊維の生産量は減少傾向で、最高 48 億円あった売上が今では 30 億円を下回っている。栃尾で作られた繊維は原材料として東京や大阪の有名アパレル企業に卸されているが、生産者名が表記されることはなく、誰にも認知されないとお話だった。私たちは、栃尾の布をもっと多くの方に知ってもらいたいと感じた。

イベント企画で栃尾の繊維を PR したいとお話ししたところ、サンプルのはぎれを大量に提供したい、というありがたいお言葉を頂いた。組合様自身も多くの企業やイベントと連携し、PR 活動に力をいれているとお話だった。そうしたご経験やネットワークも活用して、ゼミの活動を応援して下さいとのありがたいお言葉も頂いた。

3.2 おりなす訪問

続いて 6 月 11 日にはおりなす（栃尾産業交流センター）を訪問し、昨年度に商品開発のための裂き織りのご指導でお世話になった島様、中村様より、現在の織物についての活動状況やイベントの取り組みについてお話を伺った。

おりなすで活動されている「紬の会」の現活動状況を伺ったところ、雁木あいぼ、ゴールデンウィークのイベント、遊雪祭り等のイベントでの活動、さらに小学生の総合学習や幼稚園での織物講座等に取り組みされていた。これらの活動は年に 4～5 回で、加えて、小学生対象の手織りや染めの教室、大人対象の草木染め教室等のおりなす主催事業もあるとのことだった。中村様からは、私たちが鯉のアクアリウムを開催する場合に、会場で植物や鯉を織った作品展示も可能だとアドバイスいただいた。

〔図表 5〕おりなすヒアリングの様子



〔図表 6〕織り機の説明



それまでのゼミでの話し合いの中で、白昼堂堂で繊維関連のワークショップや展示会、体験講座などを開催してはどうかという案が出ていた。それを受けて、島様と中村様にそうしたイベント開催は可能かお聞きしたところ、可能だが、展示作品の収集には準備が必要であること、作品の盗難に要注意であること、などのご意見を頂いた。また、織物の体験講座を開催するとすれば、私たち学生も実際に織物を体験しないと意味がないだろうとのアドバイスもいただいた。

さらに、何らかのイベントを通じて、趣味で織物に取り組む方々のコミュニティ活動を通して栃尾の繊維を広めたいという考えをお伝えしたところ、織物のPR活動は大歓迎であり、ぜひやってもらいたいというお言葉もいただいた。そうしたイベントの具体的な広報手段としては、長岡市政だより、栃尾タイムス、近隣施設へのポスター、チラシ配布、ホームページ掲載等が効果だろうとのアドバイスをいただいた。

以上のいただいたお話をもとに、栃尾繊維をどのようにイベントに取り込んで栃尾の織物のPRにつないでいくべきか、ゼミで検討する必要があると考えた。

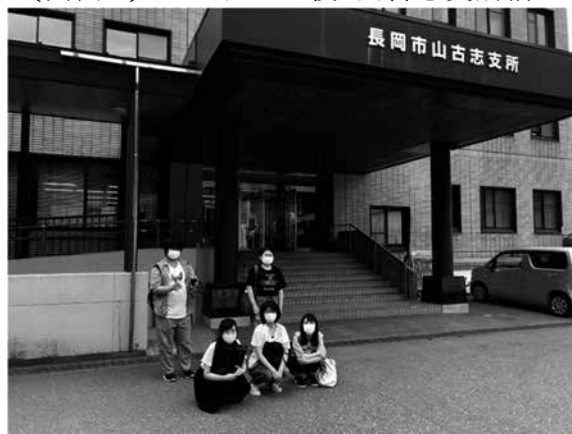
3.3 錦鯉の活用に向けて

私たちは、今年度も錦鯉の活用とそのPRに取り組むことをイメージして、去年お世話になった長岡市錦鯉養殖組合様を訪れ、ヒアリングとご協力依頼を行うことにした。7月1日に長岡市山古志支所内の組合事務所にて、ゼミ生5名で養殖組合の上田様よりお話を伺った。今年度の企画案の説明を行い、それが実現可能かどうか、また今年もご協力いただけるかご相談し、錦鯉を使用するにあたっての注意事項などをお聞きした。

〔図表7〕ヒアリングの様子



〔図表8〕ヒアリング後 山古志支所前



〔図表9〕長岡市錦鯉養殖組合様から送っていただいた資料



この段階での私たちの企画案として、ビニールプールの中に数尾の錦鯉を泳がせたいというご説明をしたところ、「それは可能だが、錦鯉は水温が下がると動かなくなるので、地面に直に置くのではなく、発泡スチロールを敷くと良い」というアドバイスをいただいた。錦鯉は上から見るのではなく、横から見た方がきれいであるというご指摘もいただいた。ご協力いただける時期に関しては、繁忙期には鯉の運搬までの作業を手伝うことができないが、錦鯉の提供のみであれば検討して頂けるのご回答をいただいた。

また、後日、様々な錦鯉に関するパンフレットをご郵送いただいた。今後の活動に活かせる資料となった。このヒアリングを踏まえて、イベント開催の内容を一層詰めて、できるだけ早く具体的な協力依頼をすべきだと考えた。

4. 「杜々の森×錦鯉×栃尾繊維」を融合したイベントの決定

4.1 インスタレーションによる布の森を表現

以上のヒアリングやフィールドワークをもとに、私たちは具体的なイベント案を話し合った。夏休み期間中も、ZOOMによる打ち合わせをほぼ毎週実施し、議論を重ねた。

〔図表 10〕 加治アドバイザーを招聘しゼミで議論



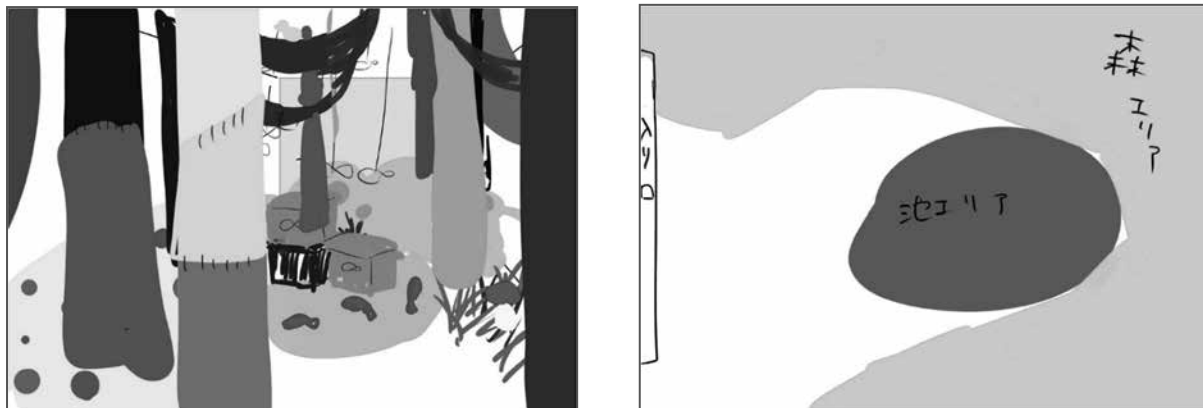
そうして、最終的に、杜々の森をテーマに、栃尾繊維と錦鯉を用いて白昼堂のギャラリー内に杉林や池を再現し、布の森を錦鯉が泳ぐ様子をイメージした「インスタレーション」の展示に決定した。「インスタレーション」とは、空間全体をアート作品として構成する手法である。両アドバイザーから技術面でのアドバイスをいただいて、ゼミ生オリジナルのインスタレーション作品の実現を目標とした。単純な杜々の森の再現ではなく、錦鯉と栃尾繊維の融合による幻想的な空間アートにより、集客力の高い展示イベントを狙いとしました。

また、栃尾の繊維のPRのために栃尾繊維を装飾のメイン素材として、森の再現すべては栃尾繊維で表現することにした。昨年度のノウハウを生かし、錦鯉を活用して山古志などとの域外コラボにも取り組むことも決定した。

4.2 インスタレーションの基本構想

杜々の森の杉林の芸術表現として、天井から長い布を垂らす案や、錦鯉の周りに布の植物や鳥などを配置する案が出た。また、錦鯉の展示で池を表現し、実際の杜々の森全体の再現を図った。初期の構想案のイラストを以下に示した。

〔図表 11〕 展示の構想案のイラスト



(執筆担当) 金子 響

5. 栃尾縁日へのイベント参加

5.1 「栃尾縁日」開催の情報獲得と開催日の決定

栃尾地区でのヒアリングなど様々なフィールドワークをするなかで、7月に入り地域の方々から、10月23～24日に農業祭・トチオノアカリなど複数の大規模なイベントの合同によるお祭りが計画されている、という貴重な情報を得た(そのお祭りは後に「栃尾縁日」と名付けられた)。

さらに栃尾商工会事務局長の武士侯様から、長岡市栃尾支所地域振興課主催の打ち合わせが開催されるので参加してはどうか、とのお声がけをいただいた。そうして、PR班の代表者とともに同打ち合わせに参加することができた。7月30日、10月5日、10月15日、11月16日の計4回、栃尾文化センターでの打ち合わせに参加した。

当初、イベント開催時期について、私たちは昨年度同様に12月か11月頃を想定していた。しかし、栃尾文化センターでの打ち合わせでいただいた情報をもとにゼミで相談した結果、集客効果を高めるために「栃尾縁日」に合わせて開催すべきだ、という意見で一致した。こうして、イベント開催は10月23日(土)～10月31日(日)に決定した。オープニングを栃尾縁日の開催に合わせたのである。

栃尾縁日の打ち合わせでは、PR班のイベントであるクイズラリーとともに、私たちにぎわい班の白屋堂堂におけるインスタレーション展示のイベントについても説明した。私たち大学生によるイベントには大いに期待している、と打ち合わせに参加された栃尾地区の皆さんは温かい言葉をかけて下さった。

なお、打ち合わせ全体としては、主に「栃尾縁日」広告用のチラシのデザインやコロナ対策などについて話し合いがなされ、その情報はイベントを実施する各団体で共有された。特にコロナ対策関連では、夏に全国的に感染者数が急増していたことからイベント開催を

危惧する意見もみられた。祭り当日での消毒液の設置場所や消毒の方式（ウェットティッシュか噴霧型か）、お祭りを広報する範囲などが議論された。

〔図表 12〕 栃尾文化センターでの打ち合わせと「栃尾縁日」パンフレット



この栃尾縁日の打ち合わせは、私たちにとって地域連携の姿を生で見る体験となり、さらに様々な団体の方々との交流を深める場にもなった。このように栃尾地区で地域おこしに情熱を持った諸団体と協働してイベントを開催することは、昨年度まで実現できなかったことである。地域連携の大切さを肌で感じる貴重な機会となった。

5.2 目標値の設定

目標管理の意識が希薄だったという昨年度の反省から、今年度はイベント来場者数の目標値を設定し目標達成の意識を明確にした。白昼堂堂が会場となることから、これまでの白昼堂堂で開催されたイベントの平均来場者を超えることを目指した。

加治アドバイザーは白昼堂堂の管理も担当されており、これまでの来場者実績をお聞きした。前年夏のオープン以来、土日に開催された展示会（アート作品の個展など）の平均来場者数はおよそ150人だとのことだった。これを踏まえて、今回の展示イベント中、特に栃尾縁日の10月23日（土）と24日（日）の2日間について、300人（＝150人×2日）を集客目標とした。昨年度のミニ・アクアリウムでは4日間で150名程度だったことから、それを大きく超えるパフォーマンスを目指すことになった。この数値に対して目標管理の意識を高め、以後、イベントの魅力向上や広報への取組に一層励むこととした。

（執筆担当）米山 和成

6. 補助金申請への挑戦

6.1 活動資金の調達～補助金申請に向けて「ふれとち」発足

昨年度のミニ・アクアリウム開催は「とちおにぎわい委員会」との共同事業だったため、同委員会が受けた中心市街地活性化補助金で支援して頂いた。私たちが活動資金面について心配することはあまりなかった。

それに対して、本年度は昨年度を上回るイベントを開催したい、自分たちの力で栃尾地域を盛り上げたい、自分たちで展示企画を実現したい、という強い思いを私たちは抱いた。そこで、活動資金の調達に自分たちの力で取り組むことにした。

アドバイザーの助言もあって、まず公的な補助金が活用できないかを調べ、長岡市には地域活動を支援する様々な助成制度があることが分かった。個々に申請要項などを確認して、採択いただける可能性が高いと思われた「未来を作る市民活動応援補助金」という助成制度を見つけた。さっそく長岡市役所に事前相談でお電話して、事業概要をお伝えしたところ、「学校での学習活動は申請対象にはならない」と断られてしまった。

落ち込みつつも、諦めずに引き続き申請可能な補助制度がないか調べて、ながおか・若者・しごと機構の「若者提案プロジェクト」という補助制度を見つけた。

8月5日に機構に話を伺ったところ、そこでも「学校の活動の補助申し込みはできない」と言われたが、なお詳しくお話を聞くと「有志団体が学校活動を行うなら申請が可能」という説明を受けた。そこで、私たちはゼミとは別に「ふれとち」という有志の団体を発足し、その団体として申請することにした。

「ふれとち」とは、「ふれあう栃尾」「ふれふれ栃尾」を目指す組織であることを示したネーミングである。栃尾雁木通りの白昼堂堂を拠点とした交流人口の増加に寄与する活動、地域資源の活用を目指した取り組みを行う団体として、ふれとちが発足した。

6.2 苦心した申請手続き

未経験の補助金申請の手続きは、なかなかうまくいかず苦心した。機構のご担当者とは電話で26回のやり取りを重ね、そのたびに書類不備のご指摘を受け指導いただいた。とりわけ事業の目的、概要、資金使途の説明の記述欄では、正確に細かく記入せねばならず、機構ご担当者に加えて、加治アドバイザー、業者の方をはじめ多数の方々に連絡を取り情報を収集して書類上に整理した。

申請書作成で、機構ご担当者から指導いただいた主なポイントは以下のとおりである。

1つ目は、全体的な書き方である。初めての申請書作成で慣れていなかった点が多い。当初は、熱意を伝えるために書式の枠ギリギリまで記入したが、読み手のことを考えて箇条書きなどにより簡潔に記述した方が良いとアドバイスを受けた。

2つ目は、支出面の記載である。当初、栃尾繊維の仕入れ費用がどの程度か全くわからず漠然と7万円と記入していたところ、「本当に7万円必要なのか」と強く根拠を求められた。そこで、販売店のサンキに出向き、繊維類の価格がどの程度なのかを確認した。また、栃尾織物工業組合様を訪問した際には、価格について詳細に教えていただいた。

会場装飾費、消耗品費などについても、「大体これくらい」ではなく、本当に必要な品目・数量を細かく記入するよう指導された。インストールに必要な資材全般に関して加治アドバイザーと相談し、それらを具体的にリストアップし、ホームセンターのコメリで各品目の見積もりをお願いし、それをもとに申請書に正確な金額を記載した。

3つ目は、広告宣伝費についてである。広報関連の取り組みは最終審査で審査員の役員の方々から詳しく聞かれる可能性が高いとのアドバイスをいただいた。補助事業の効果を最大限にする上で広報は非常に重要であり、イベントのPRに力を入れることが求められ

るからである。ゼミで相談し、チラシによる PR の詳細な計画（作成方法、印刷部数、配布場所など）を詰めて、それをもとに申請書類を作成した。

新型コロナ関連でも指導を受けた。申請当時は新潟県内でも感染が急速に拡大しつつあった時期である。イベントは開催できるのか、感染拡大がさらに加速した場合にどのような対応をとるのかなど、細かく質問された。会場での手指消毒や検温などの感染対策を詰め、その取組内容を申請書に反映させた。

以上の経緯を経て、何とか申請書を完成できた。

〔図表 13〕 完成した補助金申請書の収支計画

項 目	金 額	摘 要
補助希望額	157,000	ながおか・若者・しごと機構
協賛金	50,000	栃尾地域事業者の方々
自己資金	50,000	大学学友会支援金
合 計	257,000	

項 目	金 額	摘 要	補助希望額
広報費	25,000	チラシ印刷代 @3.3 円×1,500 部 SNS 広告費 20,000 円	25,000
会場使用料	70,000	ギャラリー白昼堂堂	70,000
会場装飾費	112,000	その他生地 @300 円×100m、角材、タッカー、ペンキ、刷毛、釘、ビス、アクリル板、段ボール等	62,000
消耗品費	20,000	プリンタインク、紙、ファイル、その他文房具、消毒液、非接触体温計、マスク等	
謝金	30,000	廃材アーティスト加治氏（オブジェ制作指導・補助）	
合 計	257,000		157,000

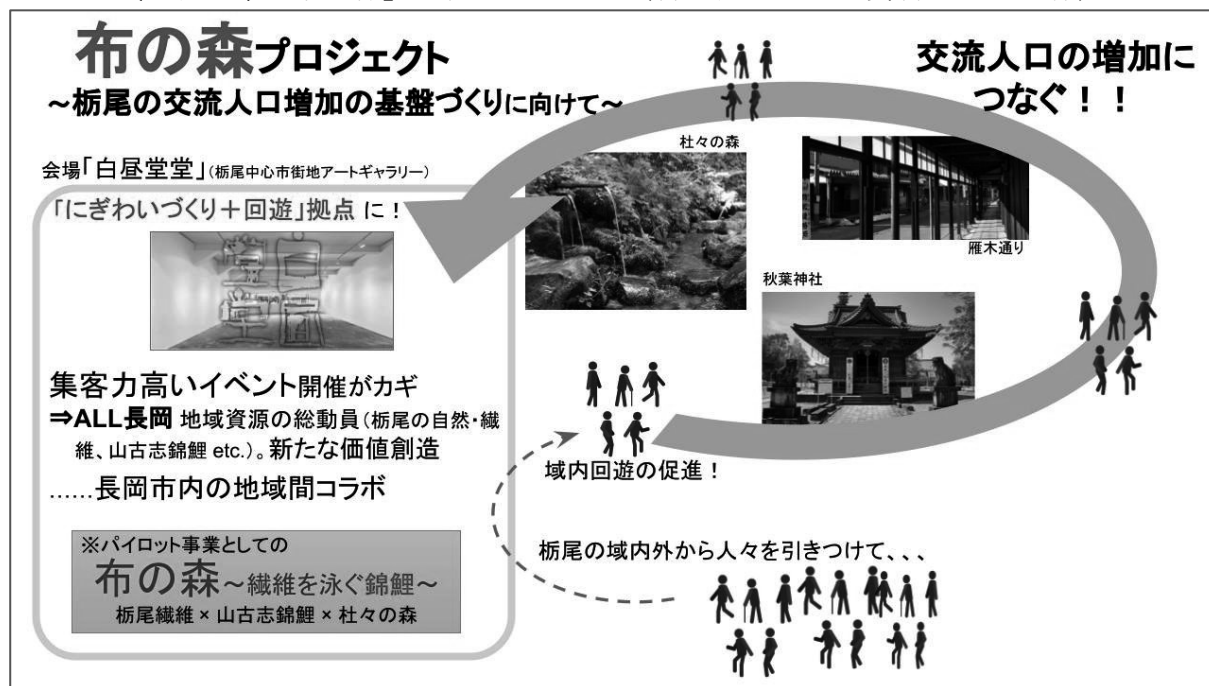
6.3 審査会でのプレゼンテーションを経て補助金獲得へ！

申請書が完成できた余韻に浸る間もなく、最終審査のプレゼンテーションが私たちを待ち受けていた。これまでご指導いただいた機構のご担当者ではなく、全く初対面の審査員の役員の方々に対してプレゼン資料により事業計画を説明する。その内容によって補助金の採否が決定される流れになっていた。

さっそく私たちはプレゼン用のパワーポイント作成に取り組んだ。しかし、こうした公共の制度の下でのプレゼンは未経験だったことから、プレゼンの基本を学ぶべく、夏休み期間中の 8 月 28 日に開催された機構主催の補助金説明会に参加することにした。

アオーレで開催された説明会にはゼミ生 2 名が参加した。主に「補助金を勝ち取るための負けないプレゼン術」や「観客にプロダクトを伝えること」といった具体的な手法を細かく教えていただいた。私たちは教わった項目に十分配慮して、パワーポイント原稿の作成を進めた。昨年度のミニ・アクアリウムのイベント動画を活用し、ポンチ絵を作成して私たちの考えと熱意がしっかり伝わるように工夫した。この作業は、今年度の取組のねらいや意義について私たち自身が頭を整理し再認識する機会にもなった（審査会プレゼンテーションで使用した取組コンセプトの図を参照）。

〔図表 14〕「布の森」取組コンセプト（審査会プレゼン資料からの抜粋）



プレゼン資料完成後は、スピーチ原稿を何度も読み、パワーポイントの画面切り替えタイミングを確認する等の対策に取り組んだ。発表後には質疑応答が予定されていたことから、その対策としても想定問答集を作り、どのような質問にも対応できるように準備した。

最終の審査会は9月6日に実施された。通常は対面方式で実施される会であるが、新型コロナウイルス対策としてZOOMによるリモートでの開催だった。プレゼン後に、「なぜ活性化地域を栃尾にしたのか」、「来年度も活動を続けていくのか」などの質問をいただいた。

発表と質疑応答が終了し、その後の審査の結果、機構ご担当者から無事に補助金採択の連絡をいただくことができた。さらに、「審査員からSNS等での有料広告の提案を受けた。もし実施するなら申請金額に広告費用2万円を上乗せする」との提案もいただいた。私たちはその提案をお受けし、合計で15万7千円の補助金を支給いただけることになった。

急いで、補助金受け取りのための銀行口座を作成する必要がある。私たちは大光銀行で「ふれとち」の預金口座の開設を申し込んだ。銀行窓口では、任意団体の口座作成に団体規約が必要との説明を受け、いただいた雛形をもとにして「ふれとち」の団体規約を作成し提出した。こうして無事開設された「ふれとち」名義の預金口座に、補助金を振り込んでいただけた。

6.4 イベント終了後の実施報告書の作成、ふりかえり

布の森のイベント終了後には、補助事業の実施報告書を提出する必要がある、その報告書を作成し提出した。

振り返ると、補助事業のなかで2万円分のSNSによる有料広告の実行には苦戦した。私たちのプレゼンテーションを聞き、期待を込めて上乗せしてくださった部分である。しかし、実施法の知識がなく手間取ってしまいスムーズに実施できなかった（詳細は後述）。

展示イベントの直前に、2万円分の当該広告費はお返ししたいと機構ご担当者に電話相談したが、「返金はできない。審査員の提案を受けた以上、絶対に実行してほしい」とのご返答だった。実施可能性も含めて事業計画は詳細にかつ慎重にすべきだと学んだ。

以上の初めての補助金申請は、書類作成等がスムーズにこなせず厳しいものであったが、大いに勉強になった。ゼミ活動として、補助金申請とその活用は前例のない大きな成果だったと思う。もともと、補助金申請は学校活動の範囲内では全く不可能だという先入観があった。しかし、自分たちの熱意や意気込みを整理してしっかり伝えれば、採択いただくことも可能である。今回の私たちの補助金獲得による地域活動は、学内だけでなく他の教育機関で学ぶ人たちに対しても、大きな可能性を示した実績としてお伝えしたい。

(執筆担当) 小泉 日和

7. 協賛金獲得の活動

以上のながおか若者しごと機構からの補助金では、補助率の制約（プロジェクト資金全体の4分の3以下）によって、自己資金も用意する必要があった。私たちは自分たちの手で5万円を調達しなくてはならなかった。それを栃尾地域での協賛金獲得で達成できないかと考えた。

まず、9月15日に栃尾商工会事務局長の武士侯様ととちおにぎわい委員会の広野様にご相談した。武士侯様は、栃尾ライオンズクラブと栃尾ロータリークラブで協賛をお願いをしてみてもどうかと提案くださり、その段取りをしてくださることになった。加えて、広野様から、私たちのイベントは谷内通り商店街の活性化にもつながりうることから、商店街の事業者の皆様へ協賛のお願いに行くと良いとのアドバイスも頂いた。

10月5日、栃尾ロータリークラブの定例会に参加し、イベント活動の説明と協賛のお願いをすることができた。また翌日には栃尾ライオンズクラブの定例会に参加し、イベント活動の説明と協賛をご依頼できた。その結果、両団体から協賛金をいただいた（各団体から2万円ずつ）。PR班との共同での協賛依頼だったため、両班で折半した。

〔図表 15〕 栃尾商工会での打ち合わせ（2021/9/15）



また、栃尾ライオンズクラブ定例会と同日の10月6日に、商店街での協賛のお願いに関して広野様に再度ご相談した。その時に、谷内二丁目商友会会長の山甲スポーツ様が同席されていたため、山甲様に直接イベントの説明と協賛のお願いができた。会長からは「栃尾に光を当ててくれることが嬉しい」という温かいお言葉をいただいた。

さらに、10月15日には谷内一丁目商栄会会長のたからや食堂様と白昼堂堂でお話しする機会を得た。私たちの協賛のお願いに関して、事前に広野様もしくは山甲様からお話しいただいていたようで、話はスムーズに進んだ。当初予定では、ゼミ生全員で手分けして商店街の各事業者をお願いでまわる予定だったが、この面談により商栄会、商友会の双方から協賛金をまとめて直接頂けることになり、両商店会から協賛金1万円ずつを頂けた。また、アドバイザーの加治様からも1万円の協賛金をいただき、PR班と折半した。

以上の結果、にぎわい班としては計4万5千円の協賛金獲得となったが、目標金額の5万円までまだ5千円足りなかった。そこで、再度、栃尾商工会の武士侯様にご相談することにした。10月20日に武士侯様を訪問してご相談した結果、栃尾商工会から5千円協賛頂けることになった。これにより、目標だった協賛金5万円の獲得が完了できた。

(執筆担当) 米山 和成

8. 栃尾繊維の獲得

インスタレーションの方向性も定まり、必要とされる栃尾繊維の分量も具体化してきたことから、9月1日に栃尾織物工業組合様を再度訪問し、繊維のご提供等をご依頼した。その結果、ロールものから端布まで、多種多様な布を提供いただけることになった。

〔図表 16〕 栃尾織物工業組合様に提供頂いた布



布は組合のイベントなどで使用することもあるが、今年はコロナウィルスでイベントが開催されず、多くの布が工業組合様の倉庫に保管されたままになっているとのことで、大量に提供が可能とお言葉だった。私たちの取組に対して、激励の言葉もいただいた。

さらに、大竹アドバイザーが仲介くださり、栃尾の事業者の皆様からも大量の栃尾繊維をご提供いただけた。最終的に、ロールで200mを超える大量の布を調達できた。私たち

は、これらの提供いただいた貴重な繊維を大切に使いインストールを完成させ、栃尾繊維の素晴らしさを人々にしっかりと伝えなくてはならない、とあらためて強く感じた。
(執筆担当) 金子 響

9. 錦鯉の手配と受け入れなどの準備

9.1 水槽の借用

今年も、錦鯉を展示するための水槽を手配せねばならなかった。昨年度の実績を参考にして、市内の小学校からお借りする方向で動くことにした。最終的に展示予定の錦鯉の数量の目安を定めた後に水槽サイズを考えて小学校へ連絡し、受け取り日程等を確定した。

昨年度は 15cm 程の錦鯉 50 尾に対して水槽 6 台をお借りしたが、今回は後述のとおり栃尾の養鯉業者様から約 100 匹の錦鯉の稚魚を提供して頂けることになったことから、昨年度より多めの水槽の用意を検討した。なお、長岡市錦鯉養殖組合様の錦鯉と栃尾の養鯉業者様の錦鯉は、サイズや育った環境が異なる。別々の水槽に分ける必要があった。

小学校から水槽をお借りする手続きや作業については、3 年野澤、星野が学校への連絡から水槽引き取りまでを担当した。昨年度の実績があったことから、お電話した際にご担当の先生に直接つながらなかつた場合でも、先方から折り返し電話連絡をいただけるなど、ご依頼はスムーズに進んだ。昨年度の経験をもとに、事前に「借用書」を用意したことも良かった。最終的に、水槽 6 台の借用を快諾いただけた。

ご協力いただけたのは、昨年度に引き続き以下の三つの小学校であった。

- ✓ 石坂小学校様
- ✓ 浦瀬小学校様
- ✓ 岡南小学校様

後日、各小学校に指定いただいた日時に訪問して水槽をお預かりし、ゼミ教員の研究室で保管することにした。同時に、各小学校にイベント後の錦鯉引き取りのご検討依頼をしてはどうかという意見もあったが、昨年度に一度検討をお願いした経緯があることから、今年度はお願いはしないことにした。

なお、各水槽がどの学校からお借りした水槽か、担当者以外にわかりにくくなってしまったという反省点がある。水槽に所有学校のラベルが付されていないものもあったからである。次年度以降は、お借りした段階で水槽を写真撮影して記録に残し学校別にファイル管理する等、誰にもわかるような手続きを実行したい。

9.2 錦鯉取引業 周社長へのヒアリング

私たちは石川ゼミ OB で錦鯉輸出業者である株式会社球球貿易の周球社長を訪問した。目的は、養殖業・取引業関連の基本と錦鯉の取り扱い方法についてアドバイスをいただくことだった。

加えて、必要な場合に錦鯉の梱包作業のお願いをすることが可能かご相談したいとも考えていた。周社長には、昨年度、ミニ・アクアリウムのイベント終了後に錦鯉運搬のための梱包作業で協力いただいている。今年度のイベントでも、同様のお願いをご相談する可能性があると考えた。

今回、周社長にお教えいただいた最重要な情報は、10～11月が錦鯉関連業者にとって最も多忙な時期だということだった。この時期に全国各地で錦鯉の品評会や商談が集中的に行われ、錦鯉養殖組合様はじめ錦鯉関係者の業務が一年で最も忙しい時期となる。長岡市でも、10月31日に山古志支所で長い歴史を持つ大規模な品評会が実施される。

〔図表 17〕 周社長（写真左）のヒアリング調査



そのお話から、私たちが養殖組合様に錦鯉の提供依頼を検討いただいている10月後半は最悪の時期であることを知った。集客効果のために栃尾縁日に実施時期を合わせた結果であるとは言え、大変なご迷惑をおかけしてしまったことを反省した。同時に、来年度以降、イベントの事業計画はできるだけ早い時期に立てて、関連のご協力者には早い時期から相談して先方のご都合に意識を向ける必要があると感じた。

続いて、周社長は錦鯉の扱い方についてお教え下さった。その主なポイントは、水槽・餌の配分・錦鯉の輸送法等の情報だった。水槽には基本的に濾過装置が必要だとのお話だった。錦鯉は水を汚しやすい魚であり、水槽の大きさや投入する錦鯉の数や大きさによって、濾過機能の規模を調整すべきだとのご指摘だった。濾過装置がない場合には、頻繁な水替えが必要で、その水替えのための水は水槽内の水温と合わせるために、前日までには作り置きすべきだと指導下さった。

今年度の展示イベントは昨年度の倍以上の長さの9日間で、その期間中にゼミ内の鯉管理担当のメンバーが会場に一人もいない日もある。そのため、上記についての情報共有が必要で、他のメンバーに水替えについて詳しく説明せねばならないと感じたが、振り返るとその情報伝達が不十分だったと反省される。

続いて、「錦鯉の輸送」における注意点についてもお話し下さった。その関連で、私たちのイベント最終日に、鯉輸送のための酸素注入と梱包作業をお願いできないか訪ねた。超多忙な時期であるにもかかわらず、周社長は何とか合間を縫って白昼堂々に伺いたい、と快諾下さり大いに恐縮した。

しかし、周社長に頼ってばかりでは良くない。来年度以降の活動も考えると、私たちが自力でできることを増やしていくべきであり、私たちにも鯉の輸送ができるようにしたいと考えた。そこで、周社長には、ある程度長い時間の鯉の輸送が私たちにも可能かどうか、またそのために必要なことは何かを質問した。周社長によれば、鯉輸送用の厚手のポリ袋

に酸素を充満できれば、30分程度の移動は可能だろうと話された。到着後にはポリ袋と水槽の水温を合わせるために、水槽内に袋に鯉を入れたまま30分間浮かべると良い等の細かいアドバイスも頂けた。

さらに、周社長は、錦鯉の専門雑誌『月刊 錦鯉』を貸して下さるとともに、業者の方々が水作りで使われている貴重なカルキ抜き剤を分けて下さった。

〔図表 18〕周社長からお借りした『月刊 錦鯉』（株 錦彩出版 刊）



©2021 (株) 錦彩出版

9.3 錦鯉提供を決定いただく最終段階での失敗

私たちは、インスタレーションの基本構想を練った初期の段階では、展示内容全体の中での錦鯉展示のウエイトを小さく考えていた。布で再現した森の中に「池」として円形のビニールプールを用意し、その中に錦鯉を5尾程度泳がせる、というイメージだった。

しかし、それに対して、両アドバイザーから、にぎわい創出のイベントとして魅力不足だとのご指摘をいただいた。杜々の森の自然をアピールするにしても、純粋な自然の再現のみでは元々関心がない人々へのアピールにはならず集客は期待できない、という客観的なアドバイスだった。魅力向上には展示する錦鯉を増やすべきで、最低限、昨年度のミニ・アクアリウムで活用した50尾程度の錦鯉は必要だとのご意見をいただいた。

そこで、私たちは当初の展示企画に修正を加えて、昨年度と同程度の数量の錦鯉の展示を目指すことにした。しかし、それには、一度ご協力のお願いで訪問した長岡市錦鯉養殖組合様に依頼内容の変更をお伝えせねばならない。すぐにご連絡すべきだったが、その他の作業や要検討事項の話し合いなどに取り組んでいる間に、ズルズルと遅れてしまった。

そうした中も、ゼミメンバーはイベント終了後の錦鯉引き受け先探しのために公的施設などを訪問し始めていた。その際にイベント企画を説明していたことから、私たちが50尾程度の錦鯉展示を目指していることが、苦情とともに外から養殖組合様に伝わってしまっ

た。加えて、補助金申請をしたしごと機構様が、私たちに対する鯉 50 尾の譲渡価格を下げられないかと養殖組合様へ直接お電話される事態が生じた。

その後、困惑された養殖組合の上田様から大学にご連絡いただいたことで、私たちは組合様にご迷惑をおかけしていることを知った。急いで再訪問してお詫びして企画変更をご説明する必要があった。8月10日に、再度組合様を訪問して謝罪と修正後の企画内容による正式なお願いをお伝えすることにした。4年の山本紘也とゼミ教員が訪問する予定だったが、交通機関の乱れにより山本が訪問できず、ゼミ教員のみでの訪問となった。

ゼミ教員からは、ご連絡の遅れによる混乱のお詫びとともに、①今年度も昨年度と同程度の数の錦鯉を展示したいと考えていること、②展示時期は10月23日～31日に決定したこと、の2点を養殖組合の上田様に説明してもらった。それに対して、いただいたご回答のポイントは以下のとおりである。

- ・10/31には山古志支所で品評会がある等、10月後半は最多忙時期であり、10/10頃以降の鯉の引き渡しは不可能である。
- ・段取りのため、鯉引き渡し希望の日程を記した文書が早急に必要。
- ・今から準備して用意できるのは最大10尾程度である。プールに入れるとの説明だったので、すでに昨年度よりも大きめの鯉を選定中だった。水槽に変更するなら、選定し直す必要がある。早急に水槽サイズの情報が必要。
- ・みなさんの取り組みへの期待から、無償での鯉提供を検討中。イベント後の錦鯉受け入れ先への引き渡しまで責任をもって取り組んで、PRに活かしてほしい。

これらに対して、上田様には大至急企画書などの対応を行うことをお伝えした。

ゴタゴタは続いた。後日、長岡市錦鯉ブランド戦略室の由井様から、企画書提出の遅れにより錦鯉養殖組合の上田様が困っておられるとのご連絡を大学にいただいた。早急に企画書を確認して、上田様に丁重にお詫びするとともに企画書を確実にお届けし、最終的に鯉の提供を確定いただくことができた。結果として、組合様のご尽力により、予定を超える25尾の錦鯉をご提供いただけることになった。

この経験から、今後は物事の優先順位を明確にし、どんなに忙しくとも外部ご協力者との連絡は最優先で細心の注意を払い、相手の意図を汲み取る。それが難しい場合には積極的な質問による確認を心掛け、互いの意思疎通の齟齬をなくしたいと反省した。

9.4 錦鯉の保管場所の問題発生！～長岡大学での展示で乗りきる

以上のとおり、長岡市錦鯉養殖組合様に錦鯉を提供いただく件が確定できた。さらに、大竹アドバイザーが仲介下さり、栃尾地区の養鯉業者様から錦鯉稚魚100尾程度を提供いただけることになった。その稚魚は、大竹様ご自身がオフィスに水槽を手配して、イベント直前まで預かって管理下さることになった。こうして、錦鯉の手配が完了したことから、私たちは受け入れ体制と作業手順の確認を具体的に進めた。

そうした中、養殖組合様から錦鯉をいただけるのが10月中旬より前の時期となること確定したことで、大きな問題が出てきた。

昨年度のミニ・アクアリウムは12月開催で、その時はイベント直前に錦鯉を直接搬入

いただくことができた。それに対して、今年度は展示開始よりもかなり早い時期に白昼堂堂に持ち込む必要が出てきたが、それは不可能だったのである。白昼堂堂には様々なイベントの予約が入っており、10月16日より前に物資を持ち込むことができなかつたからである。早い時期に養殖組合様で錦鯉を受け取り、その錦鯉を白昼堂堂のスペースが空くまでの間、どこかで保管せねばならなくなった。

錦鯉はある程度大きく、一般家庭の金魚鉢などに分けて収めるわけにはいかない。大きな水槽用の十分なスペースがあり、かつ酸素の問題を考えると白昼堂堂までの輸送時間が短くてすむ場所が望ましい。そうした保管場所はないか、ゼミで検討するとともにアドバイザーにも相談した。

ゼミの話し合いの中で、長岡大学で展示してはどうかというアイデアが出た。すでに水槽は市内の小学校からお借りする段取りができていた。そこで、ゼミ担当教員を通じて大学側に相談してもらうことにした。

大学からは、その許可がいただけた。長岡市錦鯉養殖組合様から錦鯉を譲り受けた後、白昼堂堂へ搬入するまでの10日間程度、大学玄関前に錦鯉を展示するスペースをお借りできることになった。

〔図表 19〕 水作りのための塩投入



〔図表 20〕 大学玄関での錦鯉展示作業と搬入された錦鯉



10月8日から、大学での鯉受け入れ準備を開始した。それまでに小学校からお借りした水槽を大学玄関横のスペースに配置し、水を入れた後に塩分調整の塩を投入し、ポンプを回して水作りを行った。最終的に、錦鯉養殖組合様から10月12日に鯉を受け取ることになり、その日は3年野澤が養殖組合に出向き、大学では受け入れ準備を完了した。

この大学での展示は、学内でのイベント広報のチャンスでもあった。別途制作したゼミ活動紹介のパネルを水槽横に配置することにした。白昼堂堂への鯉搬出作業はイベント前日の10月22日に決まり、大学での展示は10日間となったが、その間、先生方や多くの学生が水槽前で足を止めて鑑賞してくれた。ゼミ活動の学内でのPRに一役買ったと思う。

9.5 錦鯉移動の梱包へのチャレンジ

こうして、錦鯉の一時保管場所の問題は乗りきることができたが、もう一つ大きな問題が残った。10月22日の長岡大学から白昼堂堂への錦鯉の輸送作業である。

鯉は比較的丈夫で観賞魚に適しているとされるが、酸素不足には弱く、移動のためのパッキングでは十分な酸素注入が必須である。しかし、この作業に関してゼミ生全員が未経験だった。昨年度のミニ・アクアリウムの活動では、ゼミ生がパッキングに直接関わる必要がなかったからである。養殖組合様が白昼堂堂へ錦鯉を直接持ち込んで下さり、イベント終了後は周社長の球球貿易のスタッフの方が酸素ポンベと袋を持って駆けつけて梱包作業をこなして下さった。

なお、10月12日の養殖組合から大学までの移動では、山古志で専門業者の方が酸素注入し梱包し準備して下さっていたおかげで、箱詰めされたその袋を自動車で運ぶだけで良かった。また上述のとおり、イベント最終日10月31日に予定している錦鯉譲渡の際には、球球貿易の周社長がパッキング作業を手伝って下さることになっていたため、心配はなかった。

しかし、10月22日の大学から白昼堂堂への輸送が残されていた。周社長にお願いするアイデアはあった。それに対し、手順を勉強して練習すれば自分たちにもできるのではないかと、という意見でゼミ内がまとまり、今後の鯉の移動はゼミで行うことを決意した。

周社長へのヒアリング成果により、錦鯉の輸送に厚手のポリ袋と酸素缶が必要だとわかっていたので、それらの物資を急ぎよ取り寄せた。ポリ袋は厚さ0.05mm以上のものを使用した。酸素注入による鯉のパッキングの具体的な作業手順は、教材となるYouTube動画を見つけて、4年山本紘也を中心に練習を重ね、本番となる10月22日の大学から白昼堂堂への移動作業に備えた。

(執筆担当) 山本 紘也

10. 栃尾高校との高大連携

今年度も、私たちは栃尾高校との協働に取り組んだ。石川ゼミと栃尾高校とのコラボは3年目である。春休みの段階から、教員間での打ち合わせは実施されていたとのことだったが、昨年度同様に今年度もコロナ禍が収束せず、本格的な共同活動は難しかった。新学期が始まってから、栃尾高校との相談がほとんどできないまま夏を迎えた。

〔図表 21〕 第一回目の共同授業：グループでアイデア出し（2021/7/20）



それでも、栃尾高校商業科教諭の桑原先生のご協力により、栃尾高校での共同授業を 2 回開催できた。第 1 回目は夏休み直前の 7 月 20 日である。この頃までに、白昼堂堂でのインスタレーションの展示企画の枠組みが決定されていたことから、授業ではその取組概要を解説した後に、高校生・大学生混成の小グループによるグループワークで、栃尾繊維を使った装飾に関するアイデア出しを行った。

2 回目の共同授業は後期授業開始日の 9 月 21 日だった。既にイベントの詳細が決定されており、共同で具体的な作業に取り組んだ。事前に桑原先生にお願いして、生徒の皆さんに各自裁縫道具を持参するようご指示いただき、大学からは栃尾繊維を持ち込ませていただいて、白昼堂堂で使用する布の小物（葉など）の作成にグループワークで取り組んだ。

この授業時間は 30 分程度と短く、作業は余り進まなかった。そこで、授業終了時に、高校生の皆さんに対して、自宅などで無理のない範囲で構わないので、授業で取り組んだ作業を各自で進めてもらえないかお願いした。その成果物は、イベント開催直前に桑原先生のもとに受け取りに伺うことになった。そうして、最終的に受け取った作品は、白昼堂堂で葉や蔦などとして飾り付けに活用できた。

〔図表 22〕 第二回目の共同授業：協働で装飾物の制作（2021/9/21）



〔図表 23〕 布の森で活用された栃高生制作の葉と葛



栃尾高校とのコラボは、高大連携・高大接続事業として重要である。今後、地域全体での高大接続の枠組み作りのパイロット事業としても位置づけられる。今年度はお互いにコミュニケーションが不十分のまま、最終的なイベント準備期間での協働に終わってしまった。来年度に向けて、お互いの学習目標なども十分踏まえた上で、より実質的な共同授業として進められるよう相談することが重要である。

(執筆担当) 金子 響

11. イベント後の錦鯉・栃尾繊維の活用

今年度、私たちは錦鯉、栃尾繊維という貴重な地域資源を関係の方々からお預かりしてイベントを開催した。それらの資源はイベント終了後にも粗末な扱いは許されない。中長期的な地域資源のPRに、可能な限りつないでいかねばならないと考えた。

錦鯉は、昨年度と同様に、大切に育てて下さる一般市民への譲渡を目指し、栃尾繊維は趣味や服飾の学びなどで活用いただける人々にお渡しすることを目標とした。こうして、イベント終了後の錦鯉と繊維の有志の方々への引き渡しプロジェクトが、今年度の取組の一つの柱になったのである。

11.1 錦鯉の譲渡の準備

まず錦鯉についてである。当初は福祉施設や小学校などの池がある公共施設などに受け入れていただくことを考えた。しかし、公共施設にお願いの連絡をしていたところ、議論不十分なまま進めたこともあり、公的施設の方々から「安易なイベント開催は良くない」とお叱りを受け、養殖組合様にも連絡が行くなどご迷惑をお掛けする事態が生じた。

また、養殖組合様のご意向として、一般の市民の方々を受け入れてもらうのが望ましいというお話もいただいた。錦鯉を大切に育ててくださる方、鯉のサイズに合った水槽を用意してくださる方に譲渡してほしいというご要望があった。私達もその思いに賛同した。

そうした経緯から、長岡の錦鯉の PR 効果持続の視点から、市民の方々に地域資源に直接触れていただくのが望ましいと考え、一般の市民の方々への譲渡を目標に活動することを確認した。その PR のために、引き取り者募集の情報をイベントのチラシに明記し、ホームページや SNS でも告知した（詳細は後述）。展示会場内で配布したイベント・プログラムにも募集について記載し、ご来場者に引き取り依頼の声掛けも行った。同時に、引取者による簡易的な鯉の運搬方法をインターネットなどで調べ、円滑に引き渡せるように準備を進めようと考えた。

会場へのご来場者が引き取りを希望された場合には、名前、住所、電話番号を控え、後日改めて受け取りの段取りを連絡するという手順を進めることにした。連絡した際には、指定日に白昼堂々に受け取りに来ていただけるか、確認が必要であった。また、譲渡した鯉の放流や売買は厳禁であることなどの注意事項の確認も徹底することにした。

錦鯉受け渡しの際のトラブルを避けるために、1 組当たりお譲りする錦鯉は 5 尾までとした。移動時間が長いと錦鯉が酸欠になるため、自宅まで 1 時間以上かかる方には引き渡しを断らせていただくなどの受け渡しのルールも決めた。上述のとおり錦鯉の梱包を自分たち自身で取り組むことにしたことから、酸素注入などの梱包手順を動画などで確認し、梱包に必要な道具の準備を確認した。

（執筆担当）野澤 侑我

11.2 錦鯉飼育のマニュアルの作成

私たちは、錦鯉を受け取っていただいた方に少しでも長く育てていただきたいと考えた。周社長や長岡市錦鯉養殖組合様から教わった内容を参考にして、簡単な錦鯉の飼育マニュアルを作成し、鯉と一緒にお渡しすることにした。飼育マニュアルには、錦鯉に適した水槽の作り方、えさの与え方、水替え方法などを図を使って示した。

マニュアルの作成段階では、まず必要最低限の内容を文章にまとめて、錦鯉管理班のメンバーで読み合わせて、さらに改善に向けて意見を寄せあった。入門用として 3 ページ以内の分量に抑えた方が良い、引き取り者はご高齢の方や親子が多いと考えられるのでイラストを多用し分かりやすくした方が良い等、多くの意見が集まった。それらを元に改善を重ねて完成した。その完成版を次ページに示した。

（執筆担当）山本 紘也

11.3 栃尾繊維の譲渡の準備

栃尾織物工業組合様や栃尾の業者様からご提供いただいた栃尾繊維についても、私たちはイベント終了後の有効活用にこだわった。

ゼミ生で話し合った結果、栃尾繊維を希望者に無償で譲渡できないか試みることにした。布を大切に活用して頂ける個人に譲渡することにより、地域を超えた栃尾繊維の PR を目指した。さらに、栃尾の繊維を通じて草の根的な創作のコミュニティ活動を広めたいとも考えた。6 月に「おりなす」の島様と「紬の会」の中村様から、「ぜひ、栃尾の繊維の PR 活動を行って欲しい」という要望を受けていたが、その実現に向けてゼミ生で PR 方法を検討した結果である。

〔図表 24〕 作成した錦鯉の飼育マニュアル

錦鯉の飼育方法



作成：長岡大学

2021年10月作成 石川ゼミナール

エサの与え方

- ① 新しい水槽に移った数日間、餌は少量与えるか与えなくても大丈夫です。また食べるのは水温や水質などによって変わり、夏場は良く食べて、冬場はほとんど食べなくなるので水温 10℃以下からはエサを与えないか少し与えてください。
- ② 1日1回、数分(3~4分)で食べつくす程度の量を与えてください。与えすぎると水汚れる原因にもなります。
- ③ 水温が低いと食欲も鈍りますので量を少なくする必要がありますので注意してください。
- ④ 旅行等何日か家を留守にする際は余分にあげたくりますがかえって消化不良を起すこととなりますので通常通り与えてください。1~2週間は餌をやれなくても心配ありません。
- ⑤ 水槽の水替えや気温の変わり目の日はエサを少なめにしましょう。

水作り・塩水浴

- ① 容器を設置して水道水を入れてカルキ抜きをして、塩を水の量の0.5% (60ℓの場合、塩 300g) を入れ、エアポンプを起動させ2時間ほど動かします。
- ② 容器に錦鯉の入ったビニール袋を30分ほど浮かべます。
- ③ 袋の水をなるべく水槽に入れられないよう錦鯉を水槽に移し変えます。
- ④ 飛び出さないように網みなどでフタをして、1日間はエサを与えず、2日目から控えめに与えます。






水替え・掃除

掃除は1~2ヶ月に1回行ってください。(基本的に錦鯉は水槽に入れたまま)
水替えの際は前日にバケツを汲み置いておけば翌日カルキも抜け適温になります。水槽の1/3ほどの水を抜き大きなゴミは網ですくいます。最後に元の水の量に戻すようバケツから水を入れてください。(ホースポンプがあると水替えが楽になります)

カルキ抜き…水道水は心して飲むようカルキが多量に含有しているため、そのまま使用すると錦鯉には害がある為、その塩素を中和することが目的の作業です。

塩水浴…淡水魚を、短期間だけ塩水で飼育することをいいます。濃度を調整した塩水には淡水魚の回復力を高める効果があります。

新しい性格
と、飼い主を覚えて集まってきて、エサを手から食べることもありましてもすぐ仲良くなります。

とお金持ちが大きな池で飼育する光景がありますが実は錦鯉は周りずる特性を持っており、約10cmの錦鯉を水槽で5年間飼育した結果、成長が止まるらしいです。

ければ水温5~35℃ぐらいまで順応できます。しかし温度が高い場合ですので注意です。少なくとも5℃以上は確保をお願いします。

水槽の作り方

簡易版

- ① 投げ込み式ろ過フィルター…錦鯉は水を汚しやすいので水を健全な状態で維持するため「ろ過」をします。他には上部フィルターや外付けフィルターがあります。
- ② エアポンプ…投げ込み式フィルターに取り付けることで酸素を送り出し水槽内に循環させます。
- ③ 水温計…水温を測ることで与えるエサの量を検討出来ます。

*ガラスフタやネット等が売られています網が大きい場合使用してください。



蛍光灯…錦鯉や水槽のディスプレイをより魅力的にしてくれます。

エアストーン…酸素が足りないと感じたら入れてみましょう。

成長のコツ!
最初は余裕を感じる水槽と錦鯉の匹数と大きさを選びましょう。大きくしたい場合は水槽の大きさや飼育する錦鯉の数を減らすとよいです。

布の引き取り者募集についても、錦鯉と同様にチラシ、特設ホームページ、Instagram、Twitterで告知した。会場で配布するイベント・プログラムに明記し、会場内でも募集を呼び掛けた。ご来場者が引き取りを希望された場合には、錦鯉とは別に名前、住所、電話番号、希望の柄を記録するリストを作成し、記入された方々には後日改めてご連絡した。

また、ゼミで話し合った結果、服飾専門学校で布を活用してもらえないかという意見が

出て、その準備も進めることになった。

私たちは、以上の準備により、イベント最終日以降の錦鯉と栃尾繊維の引き渡しに備えた。

〔図表 25〕 Instagram での栃尾繊維の引取者募集



(執筆担当) 野澤 侑我

12. 広報への取組

12.1 取り組み概要

昨年度のミニ・アクアリウム事業では、コロナ禍で活動が全体的に出遅れたことから広報がほとんどできず、多くのイベント来場者を得ることができなかった。いかに素晴らしいイベントを開催したとしても、それを人々に告知できなければ良い結果が得られない。そうした昨年度の反省を生かし、今年度は広報を本格的に力を入れるべき柱の一つに位置づけた。

今年度推進した広報活動の柱は、①チラシの制作および配布、②ウェブサイトの制作、③広報 SNS の運用、④SNS 有料広告、⑤パネルの作成、の 5 つである。なお、既述のとおり、④SNS 有料広告はながおか・若者・しごと機構様に採択いただいた補助金の支給要件の一つとされていた。

12.2 チラシの計画から配布まで

12.2.1 配布チラシの制作

チラシのデザインは 8 月下旬から制作を開始し 10 月 2 日に完成した。その内容として、イベント内容、開催場所、開催日時、開催の趣旨、錦鯉と繊維の引き取り手の募集、ウェブサイトと Instagram の QR コードを記載した。4 年永田が制作した原画をもとに、大竹アドバイザーによるアドバイスで修正して完成した。

〔図表 26〕 チラシ完成

(表面)



(裏面)



このチラシでは、錦鯉と布の譲渡の告知に重点を置いた。裏面半分は譲渡告知のためのスペースに取り、イベント後に鯉と布が譲渡可能なことを明記し、譲渡の際の注意点などを細かく記載し、誤解やトラブルを回避するように努めた。

12.2.2 チラシの配布計画

8月25日にゼミでチラシの配布計画を検討した。白昼堂近辺の公的施設、栃尾地区の小中高校と旧長岡市内の公共施設、市内 JR 線東側地域のコミュニティセンター等を中心にリストアップした。そうして学校 8 カ所と役所施設 16 カ所の計 24 カ所に対して、各 50 部の配布を行う計画を立てた。印刷枚数は配布用に 1,200 部、予備 300 部の計 1,500 部とし、10月初旬配布の目標で進めた。

後日配布先の詳細を再確認し、旧長岡市内の公的施設 11 カ所、栃尾地区の公的施設 5 カ所、栃尾地区の学校 8 カ所の計 24 カ所へ各 50 部、計 1,200 部の配布を確定し、300 部の予備を確保することにした。最終的な配布先一覧は表のとおりである。コロナ禍での開催に留意して、学校への配布は全児童・生徒へ配布をお願いするのではなく、希望者への配布ないし玄関等にまとめて置いていただく等をお願いすることにした。

〔図表 27〕 チラシの配布先

<学校>	<公的施設>	
栃尾高校	アオーレ長岡	ながおか・若者・しごと機構
秋葉中学校	さいわいプラザ	中央図書館
刈谷田中学校	まちなかキャンパス長岡	市民体育館
南小学校	市民センター	栃尾美術館
東小学校	市民協働センター	とちお道の駅
東谷小学校	中央公民館	栃尾支所
上塩小学校	長岡市立劇場	栃尾観光協会
下塩小学校	リリックホール	栃尾文化センター

12.2.3 チラシ配布の流れ

(1) 教育機関への配布の流れ

昨年度の活動では、教育委員会への連絡なしに水槽借用のお願いを小学校に直接交渉したことでお叱りを受けた反省がある。この経験を活かし、今年度のチラシ配布では、まず市教育委員会に対して小中学校へのチラシ配布の許可をいただく電話連絡をした。

事前に、①急な連絡についてのお詫び、②名乗りと大学ゼミ名、③ゼミ活動の概要、④栃尾地区の小中学校へのチラシ配布の希望、の4点をしっかりと漏らさずお話しできるよう準備を整えてから電話するように心がけた。

9月30日に教育委員会にお電話し、教育課につないでいただけた。そこでのやりとりの結果、後日チラシ現物を教育委員会で確認いただいた上で配布許可をいただくという流れとなった。なお、この電話では、対応くださった係の方のお名前を控え忘れてしまうというミスがあった。今後の反省として来年度の活動に活かしたい。

後日、教育委員会へチラシの見本5枚を持参し、無事配布を許可いただけた。この訪問時に、毎週金曜日に各小学校の管理人の方が教育委員会へ寄られるという貴重な情報もいただけた。教育委員会へ預けたチラシを、金曜日のご来訪時に各小学校にお持ち帰りいただくことも可能だとのことだった。これは、来年度以降の取組でも参考になる情報である。

〔図表 28〕 チラシ配布に関する依頼電話のマニュアル

<基本>

「いつもお世話になっております。長岡大学、石川ゼミナールの（自身の名前）です。
急な連絡で申し訳ありません。私どもはゼミナール活動で栃尾地域の地域おこしのイベントを行います。広報のためのチラシを御校に置かせていただけませんか。置かせていただける場合は来週中までにお届けいたします。」

<細かい内容を聞かれた場合>

「今回ゼミナール活動の一環として栃尾繊維と山古志錦鯉を利用した展示を行います。栃尾地域の小中学生の皆さんに地域資源である栃尾繊維と錦鯉に触れていただきたいため、そのきっかけになればと思います。チラシを置かせていただけませんか。」

<注意点>

- ・届ける期日を細かく設定せず、1週間単位を見て届けると言う。
- ・チラシの届ける部数を必ず連絡する。

その後、次の金曜日までに各小学校へ配布するチラシをまとめて、配布学校名等と各枚数のラベル付けをする作業を進めることにした。今年度は初めての経験で段取りが悪く、余裕がなく直前に手作業で準備作業を進めたが、来年度は前もってラベル等を用意しておくことで、学校へのチラシ配布作業を効率的に進めることができる。

こうして教育委員会から許可していただき、チラシ配布のお願いの電話連絡を各小中高へ直接行える状態となった。今回の経験をもとに、チラシ配布に関する依頼電話のマニュアルを整理した（図表 28）。来年度以降にも、必要に応じて活用したい。

上記マニュアルを電話担当のゼミ生と共有し、10月8日に手分けして各小中高へ電話連絡をした。その結果、10月11日時点で予定の全小中高からチラシ配布の許可を頂けた。

それを受けて、チラシ 50部を7つに仕分けて封入し、各封筒に配布先、配布元、封入枚数のラベルを付した。10月13日に秋葉中学校、栃尾南小学校、栃尾東小学校の3校へ、10月14日に刈谷田中学校、上塩小学校、下塩小学校、東谷小学校の4校へチラシを持参し、学校への配布を完了できた。

(2) 公的機関への配布の流れ

公的機関へのチラシ配布では、市役所に了解いただいて各関連施設に自分たちで配布することを想定していた。そうして、9月30日にながおか・若者・しごと機構様にご相談をしたところ、長岡市の主要役所施設への配布は機構様が手配下さるとのお話をいただいた。機構様へは、計11カ所に各50部の配布依頼を行った。これにより長岡市関連の主要施設に無事配布することができた。

栃尾地区の施設については、10月11日に栃尾支所の地域振興課様にお電話して相談した。栃尾地域振興課様、栃尾文化センター様、栃尾美術館様、栃尾観光協会様、道の駅・おりなす様へのチラシ配布を希望していることをお伝えしたところ、すぐに配布を手配下さるとお話しいただいた。同日中に、配布先別に50部を仕分けし配布先名を付したチラシを地域振興課様のもとへ届けた。これで1,200部のチラシ配布の手配を完了できた。

12.2.4 予備チラシの活用

不測の事態のために用意していた予備300部についても、活用策を検討した。イベント開催まで時間がなかったことから、①栃尾縁日開催当日にとちパルのチラシコーナーに置いて頂く、②白昼堂堂での配布用に別途作成するイベントプログラム（後述）とともに配布、の2つを目指した。

①については、イベント当日でもとちパルに休憩で立ち寄った人々へ宣伝効果があると考えた。とちパルにチラシ30部を持参し、置かせていただけないかご相談したところ、快諾いただいた。チラシコーナーの一角に置かせていただくことになった。

②については、白昼堂堂で来場者に直接手渡しできることから目を通してもらいやすいと考えた。同時にイベント終了後の錦鯉と布の提供についての声かけにも活用できる。こうして、予備の300部もすべて配布する手配が整い、有効活用できた。

12.3 ウェブサイトを利用した広報

12.3.1 ウェブサイトの作成

特設ウェブサイトは無料のホームページ作成ツールである WIX を利用して作成した（「ふれとち 布の森」<https://www.nunonomori.com/>）。8月中旬に制作を開始し、9月15日に一通り完成した。イベント開催までの期間が短かったため、簡易的な動的サイトを目標した。

協賛金等の活用により有料版 WIX で作成することにした（独自ドメイン、Google へのサイト提出、SEO、広告の非表示が可能となる WIX のベーシック・プランの購入）。閲覧者にわかりやすい独自ドメイン名を取得したいと考えたのが、理由の一つである。Google への登録も重要視した。無料版で制作した場合、一般の閲覧者がサイトを訪問するには、WIX 経由のドメイン名を直接打ち込むか、そのリンクをクリックするしかなく、広報効果が限られる。それに対して、有料版では Google へのサイト提出が可能となることから、直接訪問以外の方法でも見てもらえるように手配できた（後述）。また、「MODI 工場」（<http://modi.jpn.org/>）の商用フリー素材から「木漏れ日ゴシック」を使用した。

こうして作成したウェブサイトの主なメニューは、①ホーム画面、②NEWS、③ふれとちについて、④イベント情報、⑤SNS との連動、⑥お問い合わせ、からなる。

今年度は、しごと機構の補助金申請のために有志団体「ふれとち」として企画を進めたことから、「ふれとち」という団体の活動内容の紹介を入れた。「NEWS」コーナーでは、錦鯉と栃尾繊維の引き取り手募集を記事にして、目立つようにサイトのトップに掲載した。

〔図表 29〕「ふれとち・布の森」のウェブサイト（<https://nunonomori.com>）



「イベント情報」では、展示の開催期間・時間を掲載し、会場となる白昼堂堂の場所が誰にもわかるように Google Map を組み込んだ。

「SNS」のコーナーでは、ふれとちの Twitter と Instagram をこのホームページでも見られるように工夫した。Instagram には Instagram feed というツールを使用し、Instagram 本体で投稿を行うたびに、ウェブサイト上の一覧に表示されるようにした。Twitter につい

ては、publish.twitter.com でプログラムのコードを自動生成し、WIX の HTML 埋め込みに書き込んでタイムラインを作成した。

「お問い合わせ」では、簡易版入力フォームをサイト内に用意し、お問い合わせメッセージが書き込まれた際に、すぐに対応できる環境を整えた。

12.3.2 ウェブサイトの公開

上述のとおり有料版 WIX で制作したことから、今回は独自ドメイン取得とともに Google へのサイト提出、SEO (Search Engine Optimization: 検索エンジン最適化) までの設定が可能だった。ドメイン名はイベント名である nunonomori.com とし、SEO 対策では他の広報手段で使用した原稿をもとに作成した。こうして、検索エンジンに表示されるウェブサイトを完成できた。

〔図表 30〕 ふれとちウェブサイトの Google 検索の結果



12.3.3 ウェブサイト広報の結果

ウェブサイトの訪問回数とどこから訪問されたかは、WIX のトラフィック概要の活用により知ることができる。ウェブサイトの完成からイベント終了までの間 (9月 15 日~10月 31 日) のデータを調べると、サイトの訪問回数が 150 回、アクセス者数が 112 人、平均閲覧時間が 6 分 49 秒だった。アクセス元で一番多かったのが直接検索で 74 回である。

7gaoka.jp というサイトから 21 回のアクセスがあった。このサイトは株式会社ユニークワンが運営する長岡市の地域情報サイトである。その他、Twitter から 12 回、google.com から 12 回のアクセスがあった。また、このウェブサイトは、ながおか・若者・しごと機構様の令和 3 年度若者提案プロジェクトの補助金活用事業を紹介するコーナーでも紹介いただけただけだ。

課題も残った。栃尾観光協会様の栃尾縁日のサイトなど地域活動関連の各ホームページにリンクを載せていただくお願いが時間的にできなかった。来年度、ウェブサイトでのイベント PR を実施する際は、他のホームページのリンク掲載のお願いにも取り組みたい。

12.4 SNS による広報活動

12.4.1 SNS 広報

(1) 広報アカウントの作成

6月30日のゼミ授業で、TwitterとInstagramの両方を利用し広報活動を行う方針を決めた。同日、さっそく両アカウントを作成するために専用のGmailアドレスを作成し、TwitterとInstagramのアカウントを作成した。イベント名である「布の森」をユーザーネームに設定した。

翌日に山古志の長岡市錦鯉養殖組合でのヒアリング調査が控えていたことから、その活動を広報の初投稿に取り上げたいと考え、作成を間に合わせた。その後、以後のヒアリングや打ち合わせ、高大連携などの活動に合わせて投稿していく目標を立てた。

〔図表 31〕 広報のための SNS アカウント作成
(Twitter) (Instagram)



(2) 投稿の目標とローテーション

作成した SNS での広報に向けて、8月の前期末試験週間後から後期授業開始までの間について、1週間に2人割り当て、週2回投稿の目標を立てた。後期授業開始後もこのローテーションを崩さずに布の森展終了まで投稿を続ける想定で進めた。

〔図表 32〕 SNS 投稿ローテーション表

班	氏名	担当班	担当期間
A	金子響	A	8月07日～8月13日
	小泉日和	B	8月14日～8月20日
B	永田藍美	C	8月21日～8月27日
	山本結也	D	8月28日～9月03日
C	米山和成	E	9月04日～9月10日
	磯部直樹	A	9月11日～9月17日
D	上村月乃	B	9月18日～9月24日
	野澤侑我		
E	星野宇宙		
	山本まりあ		

SNS へは、日々生活での自身の思いや感じたこと等を気軽に投稿するのが一般的である。日常的に SNS を使い慣れているゼミメンバーは少なくなく、当初は布の森 SNS へのゼミ生による PR 投稿が滞ることはないだろうと考えていた。

しかし、投稿内容の傾向が画一的になりやすく、投稿内容の重複が気になる雰囲気が出てきた。投稿開始後 2 週間程度で、メンバーが投稿内容のバリエーションに気を遣うようになり、4 週間程度経った頃にはついに投稿が滞ってしまった。メンバー内で投稿のモチベーションの差があったことも否めない。事前に、投稿内容についてより丁寧に説明して、細かい投稿計画やマニュアルを作成しておくべきだった。

SNS 広報結果をまとめると、Twitter のフォロワー 18 人、投稿ツイート 30 回、リツイート 55 回、「いいね」90 回だった。Instagram では、フォロワー 46 人、投稿 26 回、「いいね」375 回だった（2021/12/22 集計）。少なくともこれらの数値面からは、SNS の広報効果があったとは言えない。

12.4.2 SNS による有料広告への取組

(1) 有料広告のための準備

SNS での有料広告は、ながおか・若者・しごと機構様から頂いた補助金の支給条件の一つだった。確実に実行せねばならなかった。

まず、有料広告の発信をどの SNS で実施するかが問題だった。私たちの場合、より効率的な広報には情報発信エリアの限定が重要だった。それに最適な SNS は Facebook ではないかとの意見がゼミの打ち合わせで出て、Facebook に決めた。補助金に申請した金額 2 万円を活用し、広告エリアを新潟県全域として、14 日間の発信を計画した。

しかし、ゼミメンバーに経験者がおらず、どう手続きすべきか誰も知らなかった。他のイベント準備作業が忙しくなり両立できず、ゼミ内で相談する機会も確保できなかった。ずるずると先送りされて最後まで手つかずになり、イベント開催期間終盤になって何とか発信にこぎ着けるという結果となってしまった。

(2) 有料広告の発信までの手順

以下、有料広告に取り組んだ手順を振り返る。

まず Facebook の個人アカウントを作成した。Facebook は利用者の信用度を売りにしている。Twitter などとは違いアカウント作成に厳格な個人認証が必要で、運転免許証等の顔写真付き公的文書で身元を証明する必要があった。だが、私たちは誰一人その点を知らなかった。その結果、認証手続きを怠ったため、有料広告どころかアカウントの使用すら一時的に制限されてしまうという事態となった。

何とかアカウント制限を解消した後に、Facebook の business ページで「ふれとち」の団体ページを作成した。ここでも実在の団体かどうかの認証が必要で、証明に公文書が必要だった。今回は「ふれとち」の銀行口座開設で作成した団体利用規約を Facebook に提出した。そうして、大竹アドバイザーにもご指導・ご協力をいただいたおかげで、最終的に有料広告を発信できた。しかし、上記のように手間取った結果、発信開始日はイベント最終日前日の 10 月 30 日になってしまった。

(3) 有料広告の結果

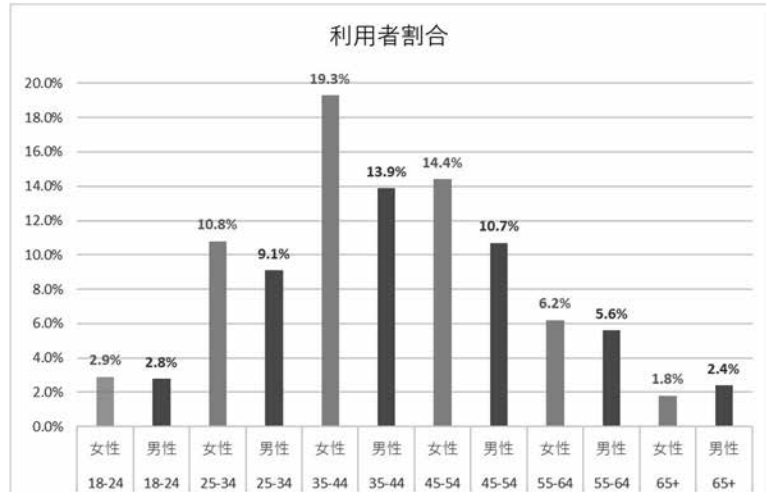
有料広告の発信期間は10月30日～11月6日である。その間、この有料広告を1回でも見た人1万4,741人、投稿への反応回数523回、投稿リンクのクリック回数76回、投稿へのリアクション回数51回である。男女・年齢別利用者割合はグラフのとおりである。

広告内の掲載リンクはTwitterとInstagramのホーム・リンクである。両SNSのフォロワーや閲覧数を増やす狙いがあった。しかし、FacebookとTwitter/Instagramとの併用ユーザーが少ないのか、期待していた効果は得られなかった。

〔図表 33〕 Facebook 有料広告



〔図表 34〕 有料広告閲覧者のデータ



12.5 展示イベントの広報パネルの作成

PRパネルも作成した。会場内に取組の意義・ねらい・地域資源のPRなどをわかりやすく来場者に伝える目的で、4年金子を中心にパネル作成にとりかかった。しごと機構様の補助金審査のプレゼンで使用したスライドの内容も活用した。完成したパネルを以下に示した（図表 35）。

さらに、9月後半に急ぎょ決まった10月中旬の大学内での錦鯉展示にあわせて、私たちの活動全般をPRするパネルも作成した（図表 36）。

上述のとおり、長岡市錦鯉養殖組合様から錦鯉を提供いただいてからイベント開催の前日までにの間、錦鯉を大学で展示することになり、私たちがどのようなイベントを開催するかを学内でPRすることがねらいだった。イベント詳細、活用した地域資源、支援いただいた組織・団体等の情報をコンパクトにまとめた。4年永田が制作を担当した。このパネルは、白昼堂堂でも配置することにした。展示を見終わった後に、このイベントがどのようなプロジェクトだったのかを理解していただくことを意図して、イーゼルで順路の最後に配置した。

〔図表 35〕ゼミ活動紹介パネル

2021 石川ゼミⅢ・Ⅳ：チーム「ふれとち」 「布の森～繊維を泳ぐ錦鯉～」プロジェクト

◇**栃尾繊維と錦鯉によるインスタレーションの展示イベント**
 栃尾地区「杜々の森」名水公園を栃尾繊維と長岡錦鯉で表現したインスタレーションの展示イベントです。昨年度活動で創設を支援した白昼堂で開催します。杜々の森は全国名水百選に選定された湧き水で知られ、古来より神域として保護されてきた四季折々の自然がある森です。杜々の森の保存を願い、それをモチーフに、地域資源である繊維と長岡錦鯉（二十村郷の錦鯉）で表現しました。

◇**栃尾地区活性化に向けた取り組みコンセプト**

布の森プロジェクト
～栃尾の交流人口増加の基盤づくりに向けて～

交流人口の増加につなぐ！！

会場「白昼堂」(栃尾市の中心部「キョウマツ」)
「にぎわいづくり」の拠点として

集客力高いイベント開催がカギ
⇒ ALL長岡 地域資源の総動員 (栃尾の自然・伝統・山古志錦鯉 etc.)、新たな価値創造
……長岡市内の地域開コラボ

※パイロット事業としての
布の森～繊維を泳ぐ錦鯉～
栃尾繊維・山古志錦鯉・杜々の森

◇**二十村郷の錦鯉**
 長岡市錦鯉養殖組合様から 20 尾の錦鯉を、また栃尾地区の養鯉業者様からおよそ 100 尾の錦鯉を提供いただきました。杜々の森の池を泳ぐ姿をご覧ください。

◇**展示に用いた栃尾繊維**
 栃尾織物協働組合様をはじめ地域の業者様に 200m を超える反物の栃尾繊維を提供いただきました。栃尾は繊維のまちとして発展した歴史があります。多くの方に栃尾繊維に触れてその素晴らしさを感じていただければと願っています。

錦鯉と栃尾繊維の融合による幻想的な空間をぜひお楽しみください。
 (イベント詳細はチラシをご覧ください。展示終了後の錦鯉と栃尾繊維の引き取り手も募集中です)

〔図表 36〕「布の森」紹介パネル

長岡錦鯉養殖組合様との連携
今年度も昨年度お世話になった長岡錦鯉養殖組合様にご協力いただき、打ち合わせや錦鯉の提供をして頂きました。

栃尾織物工業協働組合様との連携
販賣の繊維で植物を作成するため、新築織物工業組合様にヒアリングや布の提供をして頂きました。

杜々の森フィールドワーク
6月にグループメンバーで「布の森」を訪れました。

SNSの活用
SNS 控えを目指した空間を創り、広報のアカウント作成や来場者の参加の投稿と声の拡散により、インターネットを通じて地域内外への魅力発信を目指します。
このイベント終了後に人流を分析した年度別の事業計画に役立てています。
広報アカウント
Twitter: @munonogari
Instagram
HP

「布の森」

石川ゼミナールⅢ・Ⅳ
「にぎわい」創出班

布の森とは？
一栃尾繊維と錦鯉を活用した展示イベント
栃尾にある「杜々の森」をモチーフに栃尾の繊維で杉や流木などを再現。栃尾中心市街地内の空き家を改装したギャラリー「白昼堂」にて、「布の植物園」を作成します。
布の森プロジェクトは栃尾の交流人口増加の基盤づくりを行っています。
会場である白昼堂をにぎわいづくりと回遊の拠点に栃尾内外から人を引き付け、栃尾市内回遊の促進をし、交流人口増加に寄与していきます。

布の森プロジェクトの概要
「布の森」は、長岡市街地の中心部「キョウマツ」にある空き家を改装したギャラリー「白昼堂」にて、2021年10月23日(土)～24日(日)に開催します。

ギャラリー「白昼堂」とは
栃尾市街地内にある空き家を改装したギャラリー。昨年度のゼミ活動で改装工事の補助を行いました。

補助金申請
9月6日にながが・若者・しごと機構様主催の「若者提案プロジェクト補助金」の申請・プレゼンを行い、157,000 円の補助金を頂きました。

栃尾高校との連携
9月21日に栃尾高校にて、栃尾高校と共同作業を行いました。
高校、大学と連携で地域の課題解決学習を進める基盤づくりを目指します。

〔図表 37〕栃尾繊維の紹介パネル

～「布の森」は栃尾の繊維で創作されています～

栃尾の繊維についての紹介

◆ **発展の歴史**
 新潟県には繊維産業が発達した産地が多くあります。寒い土地柄にあり、綿やニットの産地としても有名です。そうしたなかで、栃尾地区にも有数の繊維産地として栄えてきました。
 栃尾の繊維は、古くは江戸時代中期に絹織（しまつむぎ）が全国的に普及した歴史を有します。近代以降とりわけ明治、大正に大きく発展し、戦後は合成繊維が伸び、全国有数の織物産地となりました。今も、繊維産業は栃尾地区全体の市民の生活基盤を支え、多様な時代の流れに対応したトータルファッションの産地として活動が続けられています。

「おりなす」での栃尾繊維を取材

◆ **栃尾紬に始まった栃尾の繊維業**
 栃尾繊維のかつての代表的な銘柄は絹織物の栃尾紬（とちおつむぎ）でした。生糸に不向きな繭から作られる真綿を原料に紡がれた紬糸を利用して絹織物です。
 近年、グローバル化の進展で中国、東アジア各国の輸入製品が増加してきたことから、栃尾の繊維業は高付加価値商品の開発に注力しています。高度な技術、新しい感性により、消費者の多様なニーズへのきめ細かな適応がなされ、関連分野を結合したトータルファッション産地として活動を続けています。

◆ **栃尾織物工業協働組合について～「布の森」に布を提供下さいました**

同組合は商標登録の産地ブランド「おりなす」を前面に打ち出し、栃尾商品のブランド浸透が推進されています。産地一丸となって、栃尾の繊維産業活性化にとどまらず、栃尾地域全体の発展への寄与を目指しています。
 今回、私たちに多くの布をご提供いただき、「布の森」制作をサポート下さいました。

栃尾の繊維を増産できる貴重な機会です。ぜひじっくりとご覧ください

※ 展示終了後（10/31以降）、ご希望の方に今回の創作に用いられている栃尾繊維を無償で提供いたします。詳しくはスタッフにお問い合わせください。

〔図表 38〕コミセンだより掲載内容

催し **谷内通りクイズラリー＆
栃尾繊維と錦鯉による「杜々の森」展示**
 ～長岡大生による2つのイベント開催～

(1)クイズラリー雁木あいぼ
 (「とちお歩く旅のまちづくり委員会」共催)
 谷内通りを巡るクイズラリーです。賞品と参加賞をご用意しています。

と き 10月23日(土) 午後5時～9時
 10月24日(日) 午後1時～8時

ところ 谷内通り・栃尾郵便局前に受付設置予定

(2)展示:布の森～繊維を泳ぐ錦鯉(入場無料)
 「杜々の森」をモチーフにした栃尾繊維と錦鯉による幻想的な空間をお楽しみください。

と き 10月23日(土)～31日(日)
 午後1時～6時(10/23・24のみ午後1時～8時)

ところ ギャラリー白昼堂(谷内通り・旧よっげ場)

問合せ (1)(2)ともに 長岡大学石川研究室
 ☎ 39-1907

また、会場の白昼堂で掲示する栃尾繊維の PR パネルも作成した（図表 37）。インスタレーションの素材となった栃尾繊維の魅力、および栃尾の繊維業の伝統について、少しでも来場者にお伝えしたいと考えた。制作は4年金子が担当し、完成したパネルは、イベント期間中に会場内の出入り口近くにイーゼルで配置した。

12.6 地域の広告媒体を利用した広報など

大学外の広告媒体利用にも取り組んだ。栃尾商工会事務局長の武士侯様に広報に関してご相談した際に、栃尾地区のコミセン便りに載せてはどうかとご提案頂いた。このコミセン便りは、地域行事予定や各種団体からのお知らせや活動報告等を伝えるミニコミ紙であり、毎月地域住民へ配布される。

大変ありがたいサポートだった。PR 班とともにコミセン便りにイベントの PR を掲載いただくことを決めた。武士侯様は、その編集部と調整して紙面を確保する段取りも引き受けてくださった。その広告内容を図表 38 に示した。こうして地域の方々に向けても広報できたことは、私たちの栃尾地区活性化に向けた熱意をお伝えする上で非常に意義あることだった。来年度も地域と密着し、地域情報紙と連携した広報に取り組みたい。

また、大学事務室の皆様のご協力により、チラシを使った報道機関向けのプレス発表（資料の投げ込みによる）もできた。可能な公共の広報手段はすべて活用することが重要だとあらためて感じた。

12.7 TV 放映による地域活性化プログラムの広報

今回私たちの活動の広報にとって何より有意義だったのは、TV 局 NST 様による報道番組で紹介いただけたことだった。加治アドバイザーが NST ご担当者様に私たちの活動の話をしてくださり、関心をお寄せいただけて実現した取材だった。

〔図表 39〕 イベント開催前日「白昼堂」での NST 様取材・撮影



9月の大学での授業中、イベント開催前日10月22日、開催中10月24日に白昼堂で撮影をして下さり、8分程度の映像にまとめて11月9日の報道番組「ニュースタッチ」で放映下さった。放映はイベント終了後だったことから来場者を呼ぶための事前 PR にはならなかったが、私たちの地域活性化に込めた考えや活動全般を社会に発信して下さった。

その動画は NST 様のご了解をいただき、11月の放映以降、長岡大学において中学生・高校生の大学見学や進学相談会などで、地域活性化プログラムを紹介する映像資料として既に活用していただいている。

〔図表 40〕 中学生が大学見学で NST 動画を視聴（2021 年 11 月）



これは単なる 1 ゼミの活動紹介を超え、長岡大学の地域活性化の教育プログラムについて、地域の中高生への PR に寄与できたのではないだろうか。同動画の今後の活用継続を通じて、次世代を担う人たちに、自分たちの地域を自分たちの手でもり立てていくという地域活動の素晴らしさに対する気づきを与える契機になればと願っている。

（執筆担当）磯部 直樹

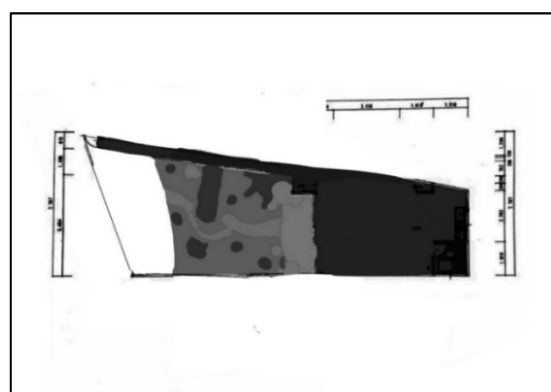
13. 会場準備作業

13.1 作業の事前の準備・相談

私たちは、夏休み中の 8 月中旬から、アドバイザーの加治様と白昼堂堂におけるインスタレーションのレイアウトの相談を本格的に始めた。下図は初期の構想イメージである。

夜明け前の暗い時間帯に森に迷い込んだような、幻想的な雰囲気イメージした。杜々の森には山の神「十二山の神様」が祀られていることから、神秘的でどこか不気味な印象も表現したいと考えた。この基本構想をもとに、アーティストの加治アドバイザーと相談し詳細の検討を進めた。

〔図表 41〕 インスタレーションのイメージ図とレイアウト案



（執筆担当）永田 藍美

13.2 イメージの具体化に向けて

それまでの構想案をもとに、10月4日には白昼堂堂で加治アドバイザーにご指導いただきながらイメージ図の再現を試行した。実際に倒木のイメージや木の配置をダンボールで表現し、インスタレーションのイメージの可視化に取り組んだ。木や植物は大きくみせ、うっそうとした印象を創出して、来場者の目を引く作品にしたいと考えた。

ライトの調整により不気味な空間の表現も可能だとのアドバイスもいただいた。構想案を再現してみることでイメージが固まり、創作の方向性を詰めることができた。

〔図表 42〕 構想案の再現（白昼堂堂での骨格の仮組み）



（執筆担当）金子 響

13.3 準備作業の体制確認、資材購入、創作作業の開始

会場準備にあたり、各メンバーの履修授業などを考慮し、準備期間、イベント開催期間、片付け期間を含めて、10月16日から11月2日までについて、以下の通りシフト表を作成した。できるだけ負荷を平準化したかったが、授業期間中であることから、授業が少ない4年生の担当日を増やさざるを得なかった。

具体的な作業に入る前に、多くの資材・道具を購入した。購入物品は表の通りである。費用は、先述のながおか・若者・仕事機構の補助金や協賛金等で負担した。

以上の準備のもと、私たちはシフト表をベースに10月16日からギャラリー白昼堂堂をレンタルし、本格的な会場準備作業に入った。

〔図表 43〕 シフト表の作成

	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火
	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2
永田☆	11-17			10-18	10-18	10-18	10-18	12-16:30			12-18					○~20	○	○
金子	11-17				10-18	10-18	10-18		16:30~21			12-18	12-18				○	○
小泉				10-18		10-18	10-18	12-16:30			12-18						○	○
山本紘	11-17	11-			10-18		10-18	16:30~21				12-18		12-18		○~20		11~20
米山☆		11-	10-17			10-18			16:30~21				12-18	12-18	12-18	○~20	10~16:30	○
磯部☆		11-	10-17					16:30~21		12-18						○~20	10~∞	○
上村		11-	10-17						16:30~21	12-18							10~15:30	10~17
野澤☆		11-	10-17						12-16:30							12-20	10~17:00	10~17
星野	11-17								12-16:30						12-18	12-20		10~17
山本ま	11-16							12-16:30							12-18	12-20	○	○

〔図表 44〕 購入した資材と道具

会場装飾・消耗品等	
ペイントローラー×4	エコフラット×2 角材×7 断熱材×2 ペンキ×12
刷毛×6	ボンド ガムテープ×21 発泡ウレタン ローラーつぎえ×3
ローラースベア×3	ウエス バテ×2 タッカー×2 タッカー針×2
ライト	ボタン電池×4 プロテクター 延長コード×4 厚紙 布
ダブルクリップ×9	マッキー×2 イーゼル メモ ノート 工作用紙 雑巾
段ボール×23	ホース ちりとり ほうき×2 ゴミ袋 コピー用紙
カッター替え刃×2	エアホース セロテープ はがき 粘着ローラー アルコール
体温計	
合計金額 130,695円	

13.3.1 資材購入および天井と壁の作業

10月16日から最初の3日間は、資材の購入と天井・壁面の作業を行った。シフトが入ったゼミ生が、資材購入組とギャラリー作業担当組の2グループに分かれて行動した。作業担当者は、加治アドバイザーに指導いただきながら取り組んだ。

壁面作業は布を三段に分け、壁一面にタッカーで貼り付けた。天井作業では、脚立を使いタッカーで天井に布を貼り付けた。当初は布を傷つけないようにクリップで貼り付けていたが、固定が難しく外れやすいことからタッカー使用に切り替えた。これらの布は弛ませて貼り付けることにより、森の草木の立体感や圧迫感を表現しようとした。

13.3.2 木のオブジェ、地面・水面の制作

10月20日に布の「木」を制作した。幹として角材を支柱とし、その周りに段ボールを巻き付けた。木が倒れないように天井と支柱の角材を固定し、タッカーで布を貼った。布で樹皮を表現するために、布を所々つまみ上げてホチキスで模様づけした。

〔図表 45〕 布を飾り付ける壁面作業と天井作業



葉は二段重ねで幹に貼り付け、6～8カ所に紐状に切断した布で引っ張り上げ、広がる葉を表現した。木は合計6本制作し、そのうち1本については支柱を壁に固定し倒木を創作し、来場者がその倒木の下をくぐるルート設計にした。また、天井や紐から布をのれんのように垂らすことで、うっそうとした森の圧迫感や手つかずの自然を表現した。

森らしい雰囲気を作り出すために、ギャラリー床面のコンクリートにも布を敷くことにした。森の地面の凹凸感の表現として、見学の順路となる道以外の床には、丸めた新聞紙やチラシを敷き詰め、数種類の茶色の布を色が被らないようまばらに配置した。その上から、栃尾高校生に制作してもらった緑色系、赤色系、黄色系の乱切りの布を草や落ち葉に見立てて散布した。

順路の部分にも工夫を施し、長い反物一枚を切らずに使用した。暗い室内の展示となるため、小さい子どもやご高齢者等の足に引っかからないように注意した。布をピンと伸ばして両側面を粘着テープで貼り付けた。曲道など布が折り重なる部分は見学順路の進行方向に沿って布を折り込み粘着テープで頑丈に固定し、歩行者が転びにくい設計にした。貼り付けた粘着テープは道の周りの布で隠し、布以外のものが目に入らないようにした。

なお、水槽は早い時期に会場内の所定のレイアウトに配置する必要があった。錦鯉を入れる水槽の水は前もって準備してカルキ抜きをせねばならず、水を入れた水槽はその重量のため移動できなくなるからである。そこで、水槽の配置場所付近の「水辺エリア」の制作は会場準備開始の初日の段階で行った。水辺の表現として、薄手の青色系の布を2種類使用し、台を設置して水槽に高低差をつけることによって滝の様に流れる水の動きを表現した。ギャラリー内の世界観を壊さないよう、人工物が目に入りにくくするために、水槽のポンプ本体やホースを次項で述べる岩オブジェなどで隠す等の工夫をした。

〔図表 46〕木のオブジェの創作（左：途上、右：完成）



13.3.3 その他オブジェ制作

以上の他にも、岩、石灯籠を制作した。岩は段ボールで成形し、緑色系の布で覆った。緑系にすることで苔のついた人の手が加えられていない自然を表現した。

神秘的なイメージを与えるために、神社や古い建造物等でよく見られる石灯籠を制作した。板状の断熱材を切断、接着し成形した。一番上の蓋部分は貼り付けず、取り外し可能な設計にし、灯籠部分にろうそく型ランプを入れて灯りがつく構造にした。

また、加治アドバイザーにご依頼し、廃材アートの錦鯉を制作して頂いた。岩はポンプ周辺を中心に配置し、石灯籠・錦鯉のオブジェは水辺エリアに設置した。

〔図表 47〕 制作した石灯籠（大学で撮影）



13.3.4 鯉の搬入

以上の会場装飾作業を進める中で、10月20日には、栃尾観光協会の島様を通じて栃尾の養鯉業者様から数十尾の錦鯉の稚魚を提供頂いた。島様が白昼堂堂まで鯉を運搬して下さり、ゼミ生で水槽に移した。島様から受け取った錦鯉は小サイズの稚魚で管理が難しく、慎重な取り扱いを心がけた。

〔図表 48〕 大学での鯉梱包作業



〔図表 49〕 栃尾に向け大学から鯉搬出



〔図表 50〕 白昼堂堂での鯉の搬入



続いて大竹アドバイザーが前月からオフィスで預かり管理下さっていた栃尾の養鯉業者様の錦鯉稚魚も搬入した。白昼堂堂とオフィスは隣接していることから、ゼミ生がオフィスに伺い、水槽に入った状態で移動した。

10月22日には、長岡大学内で展示していた長岡市錦鯉養殖組合様からご提供頂いた錦鯉25尾を白昼堂堂に搬入した。12時頃から車を所有するゼミ生が中心に協力して、鯉、水槽、ポンプなどを一斉に運搬した。ゼミの鯉管理担当者を中心に、鯉パッキング用の厚手のポリ袋を二重にして水槽の水と錦鯉を入れ、酸素缶を使って酸素をパンパンに注入した状態で箱等に入れて、自動車で運んだ。

鯉はとりわけ酸素不足に弱く、酸素の量から30分程度の運搬が限界であるため、時間との戦いだったが、トラブル無く移動できた。こうして、すべての鯉の白昼堂堂への搬入が無事完了した。また、この経験から、10月31日予定の白昼堂堂での鯉の梱包作業も、周社長には頼らずに自分たちで乗りきることを決めた。

13.4 展示の最終調整と完成に向けた時間との争い

オブジェの制作と鯉搬入を終えた後、鯉の搬入などの作業と並行して、照明の調整等に取り組んだ。水による光の反射、証明の色や角度、魅せたい展示等を考慮した上で、全体的に照明の数を減らして神秘的かつ不気味な雰囲気での展示に仕上げた。

こうして一通りインсталレーションが完成し、最後に受付を設置した。受付には消毒用アルコールや体温計、来場者台帳を用意し、新型コロナウイルス対策に備えた。

〔図表 51〕 インスタレーション「布の森」がついに完成！



会場創作作業の全般を振り返ると、作業量の膨大さに対して準備期間と人手が大幅に不足した。特に準備期間の後半は開催初日までの時間との争いになり、多くのメンバーがシフトに入っていないにもかかわらず授業終了後に白昼堂堂に駆けつけ、作業に加わった。

それでも作業が間に合わず、イベント開始前の数日間、一部のゼミ生は深夜2時過ぎまで作業を行い、泊まり込みで作業を続けた。予定通り開幕できるかどうか切迫した状況だったが、イベント前夜の10月22日（金）22時に何とか準備作業が全て終了し、開催初日を無事迎えることができた。

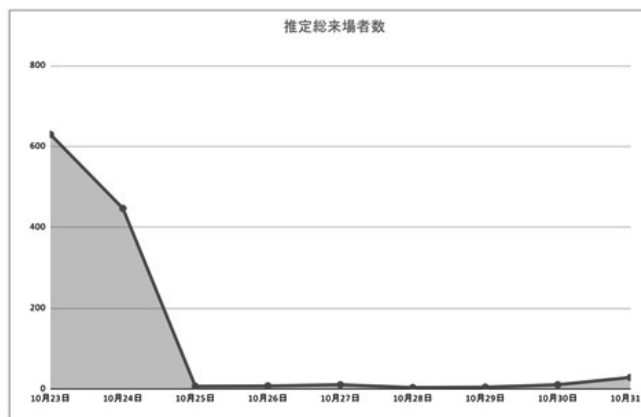
（執筆担当）永田 藍美

14. イベント当日

14.1 イベント当日の概要

10月23日（土）、遂に「布の森展 in 白昼堂堂～100尾の錦鯉と栃尾繊維のインスタレーション～」の開催初日を迎えた。展示期間は10月23日から31日までの9日間、会場は栃尾商店街内のギャラリー白昼堂堂である。特に、10月23日（土）と24日（日）は、白昼堂堂が位置する谷内商店街をメイン会場とした大規模な祭典「栃尾縁日」の開催日でもあった。「布の森展」もその日程に合わせて準備してきたのである。

〔図表 52〕「布の森」来場者数推移



栃尾縁日では地域内外から多くの来場者があり、その中の多数が白昼堂堂に来場下さった。開催期間中の総来場者数は1,152人で、目標だった300人を大きく上回った。開催期間9日間の来場者数の推移は上図のとおりである。栃尾縁日の10月23日（土）と24日（日）に来場者が集中したが、25日（月）から最終日までの期間にも近隣の方々が来場して下さった。子どもからお年寄りまで、幅広い年代の方々に訪れていただけた。

開催期間中に行った取組や注意した点、気づきなどを以下に整理した。

14.2 会場での取組

14.2.1 新型コロナウイルス感染症対策について

感染症影響下でのイベント開催にあたり、感染拡大防止策が必要だった。補助金を支給下さったしごと機構や「栃尾縁日」事務局（栃尾支所地域振興課）の皆様からも強く指示されていた点である。

私たちが行った対策は、入場の人数制限、入場時の検温・消毒、感染者発生の場合に備えた連絡先の記入等である。検温・消毒・連絡先記入を行った方のみに入場を限らせていただくよう徹底した結果、この展示イベントを通じた感染者発生はなかった。

14.2.2 プログラムの配布とイベント後の錦鯉・栃尾繊維引き取りPR

イベント会場で配布したプログラムでは、表面にイベント概要や協賛者ご紹介などを、裏面には錦鯉と栃尾繊維の譲渡に関する詳細情報を記載した。ご来場者に配布し、受付でも口頭でイベント後の錦鯉と栃尾繊維の譲渡をPRした。配布したプログラムを次ページに示した。

受付には「錦鯉引き取り希望者」と「栃尾繊維引き取り希望者」の記入帳をあらかじめ用意しておき、こちらからの声掛けに対して引き取りを希望してくださった方には氏名、住所、連絡先をご記入いただいた。

錦鯉については、イベント終了時（10月31日18時）に白昼堂でのみお渡しすること、栃尾繊維については10月31日18時以降に直接お渡しするか郵送（輸送料金は受取人払い）かを選べること、などをお伝えした。引き取り希望者が意外に多くおられ、驚くと同時に嬉しく思った。

14.3. イベント開催期間中に注意した点

開催初日の10月23日は来場者が非常に多く、小学生以下の子どもだけでの来場も少なくなかった。会場内を走り回ったり、順路を外れて展示スペースに侵入したり、という事態もあった。そこで展示スペースへの進入防止策として、走らないように直接呼び掛けるとともに、2日目以降は順路の脇に流木を設置した。会場内を一方通行に設定し、ご来場者にその都度ご案内した。会場の外にはソファを置いて休憩していただくスペースとした。

会場外からは中の様子がわかりにくかったことから、入り口のそばに展示関連のパネルを設置すると同時に呼び込みを行い、ギャラリー内で何の展示をしているのかをわかりやすくお伝えできるように心掛けた。それでも会場内が暗かったこともあり、「外から中が見えにくく入りにくい」との声をいただいた。その後、入り口部分の暗幕を上げておくなど、来場者が入場しやすい雰囲気作りで適宜改善を重ねた。

〔図表 53〕 会場「白昼堂堂」入り口



また、今回錦鯉を提供下さった長岡市錦鯉養殖組合様への感謝の気持ちを込めて、事前に上田様および山古志地区の地域おこし協力隊員の渡辺様からお送りいただいていた長岡市錦鯉品評会（山古志支所にて10月31日開催）のポスターをギャラリー前に掲示した。

来場者の検温・消毒については、非接触型の検温器を使用し、消毒液は不足しないよう多めに用意した。加えて、前述のとおり、すべての来場者に連絡先と住所を所定のノートに書いていただくなど、感染症対策を徹底した。

なお、展示期間中に、栃尾の養鯉業者様から提供いただいた錦鯉の稚魚が死んでしまうことがあった。来場者がいない時間帯（開場時間前など）に、水質や鯉の状態に一層注意を払い、ご来場いただいた方々に元気な錦鯉を見てもらえるようにあらためて気を引き締めた。

14.4 イベント開催期間中の気づき

「布の森」見学後に私たちの活動に興味を抱かれ、質問や感想を直接お寄せ下さる方も少なくなかった。地元の子どもたちは展示が気に入ったようで、何度も来てくれて、会場内の暗さと雰囲気相まって「お化け屋敷のようだ」という感想も寄せてくれた。

受付に今後の活動のための募金箱を設置していたが、ご協力下さる方々も大勢おられた。これからの活動を応援したい、と声も掛けていただいた。私たちの活動に対するモチベーションの向上にもつながり、来年度以降もよりよい地域活性化活動に取り組んで、地域に貢献していきたいとあらためて感じた。

来場者は子連れの方やお年寄りの割合が高かったように思うが、中高生や学生にも一定数来場いただけた。この調子で、幅広い年代の方々に栃尾商店街へ訪れていただき、栃尾について知ってもらい、興味を持って欲しいと思う。

イベント全体を通して、栃尾の地域おこしに取り組む方々や会場近隣の方々との連携拡大につながり、栃尾地域の方々との交流を深めることができたと感じた。地域の方々と協力することの重要性を再確認できた。

（執筆担当）上村 月乃

15. イベント終了後の片付け・撤収

15.1 鯉の引き渡し作業

10月31日（日）18時に「布の森」展示イベントは無事終了した。その後、私たちには錦鯉と栃尾繊維の希望者への引き渡し作業、および会場となった白昼堂堂の片付け作業という大きな任務が残っていた。

開催期間中にも、展示されている錦鯉を見てさっそく譲渡してほしいという声があったが、希望者には会場受付で希望者リストに連絡先等を記入いただくという対応を徹底した。最終的に、リストには10人以上の方が記入下さっていた。お渡しする錦鯉が足りなくなってしまうのではないかと危惧されたが、結果的に数尾残った。あらかじめ、展示する錦鯉の数と譲渡できる数のきめ細やかなすり合わせが必要だと感じた。

事前に申し込んでいただき確認連絡を済ませた方々には、イベント最終日に会場へお集まりいただいた。受け渡し開始は18時からとし、当日、指定時間より前に来ていただいた方には連番で数字を記した整理券をお渡しし、開始時刻までお待ちいただいた。

引き渡し開始時刻になると、整理券番号の小さい方から順番にご案内し、水槽を見て錦鯉を選んでいただいた。私たちゼミ生が、その鯉を梱包用のビニール袋に移して酸素缶で酸素を注入してパッキングし、私たちが作成した錦鯉飼育マニュアルとともにお渡しした。

以上の手順をしっかりと準備・確認していたことから、受け渡しはスムーズに進み、整理

券をお渡しした全ての方に錦鯉を無事引き渡せた。数尾の鯉が残ったが、ゼミ生の1人が自宅に引き取ってくれた。こうしてすべての錦鯉を無事に譲渡することができた。

なお、当日一番最初に引き取りに来場された方が、開始時間前だったことから、整理券を受け取っていったん帰宅され、指定時間を勘違いされて遅れて来られたために順番が後になってしまうという事態が生じた。たまたまお渡しする鯉が確保できたことからトラブルにはならなかったが、会場で配布したプログラムにイベント終了後の譲渡開始の明確な日付と開始時間まで記載していれば回避できた事態だった。来年度以降の取組では、こうした事前の情報提供について確認が必要である。

来場者に無事錦鯉をお渡しした際に、小さな子どもの喜ぶ姿を見ることができ、さらに「ありがとう」と感謝の言葉もいただけた。錦鯉の引き渡しは、地域活性化の活動を一般市民の方々に直接PRできる場になったと強く感じるとともに、私たちの活動へのモチベーションを大いに高めてくれた。

〔図表 55〕 錦鯉を選んでいただく



〔図表 56〕 錦鯉の梱包・酸素注入



15.2 布の受け渡し作業

布の引き渡しは、イベント終了後の片付けが概ね終了した11月3日から開始した。引き渡し方法として、長岡大学に直接取りに来ていただくか、もしくは郵送による引き渡しを行った。作業がスムーズに行えるよう、確認のために引き取り希望者と事前に電話で連絡を取っていた。

なお、布の引き渡しをイベント終了後に行うことはプログラムに記載していたが、会場撤収作業を済ませた後になる、ということまでは明記していなかった。そうした詳細を希望者のお一人お一人にお電話して伝えなくてはならなかった。それが十分徹底できなかったことなどから、引き渡しに手間取るミスが生じた。ゼミ・メンバー間の情報共有や詳細な手順確認が不十分だったと反省される。

布を長岡大学まで取りに来て下さった方もおられ、在庫の布をご覧いただき選んでいただけて引き渡すことができた。その際、「栃尾繊維に触れる機会がなかったので、とても嬉しい」という声や、「趣味で小物やバッグを作っており、布を自分で調達するにはお金がかかるので、無償でいただけて嬉しい」というお言葉を頂いた。また、「次年度も布を使った

活動を続けて欲しい」というお言葉もいただいた。

このように直接に布の引き渡しができることは、市民の方とお話ができる貴重な機会となった。加えて、私たちの活動をしっかり理解していただけたと感じる。来年度以降の活動も応援くださった方もおられて、次年度の活動への意欲向上につながった。

郵送希望者には、事前に指定していただいた布を郵送でお届けした。結果として、11月中旬には引き取り希望者全員に引き渡しを行うことができた。

しかし、布が大量に残された。服飾専門学校への呼びかけに対しては、郵送料金の着払いという条件が厳しかったのか、希望組織がなかなか得られなかった。

今後も全国の服飾専門学校等へは一層の声かけを進める予定である。引き取り希望の連絡をいただけたら、お渡しして活用していただく。それでも余った布については、今後も無償譲渡のPRの継続を行うとともに、来年度の活動で活用する計画を考案中である。

15.3 撤収作業の内容など

上述のとおり錦鯉受け渡しが無事終わり、その後に会場片付け作業に移った。10月31日（日）の夜は主に展示物の片付けと布の撤収に取り組み、翌日以降も作業を続け、完全な片付けに4日間かかった。イベント最終日には私たちにぎわい班全員が集まって作業を行った。予想以上に大量のゴミが出てしまい、その処分には手こずった。

装飾に活用した大量の栃尾繊維は、引き取り希望者にお渡しするのに加えて、今後も何らかの活用が考えられるため、できる限り傷を付けない状態で取り外すように心がけた。

ギャラリーの壁や天井には布を固定するためにタッカーで多くの傷を付けてしまっており、修復作業が必要だった。事前に用意していたパテで穴を埋め、乾いた後にヤスリをかける作業を行った。最後に壁にペンキを塗って修復した。白昼堂堂の天井は高く、天井の作業は脚立上の作業となり、安全にも気をつけねばならなかった。

修復作業が終わった後も、様々な物資の引き上げが最後までなかなか完了せず、白昼堂堂の借用期間を予定より数日間オーバーしてしまった。最終的に完全な撤収は、事前にシフトを組んだ期間外の11月5日までかかった。白昼堂堂の管理者でもある加治アドバイザーには多大なご迷惑をおかけしてしまった。そのように想定以上に後片付けには手間取ってしまったが、何とか作業の全行程を終了できた。

（執筆担当）山本 まりあ

16. 今年度の活動の振り返り

16.1 概要

今年度の私たちの活動目標は、栃尾地区の交流人口の増加への寄与である。そのためには地域資源を活用した集客力あるイベント開催でにぎわいを創出することが有効だと考えた。昨年度のノウハウを生かし、「白昼堂堂」を拠点に、栃尾とつながりのある山古志の錦鯉も活用したイベントをできないかと考えた。また、昨年度に栃尾繊維のPRを目的に「裂き織り」を体験したことから、栃尾の伝統産業である繊維も活用することになった。

とりわけ今年度は、栃尾地区の名勝「杜々の森」に焦点を当てたイベントにすることで、訪問者減少により設備・管理規模の縮小が余儀なくされている杜々の森の現状を打開する

ために、その注目度を向上させることができるのではないかと考えた。

そうした今年度の活動を振り返ると、まずは、イベント「布の森」を何とか計画的にやり遂げたことを大いに評価すべきだと思う。多くの地域の人たちの力もお借りし、にぎわい班一同の協力により成功できたのだと強く感じた。

16.2 主な取組成果

今年度の私たちの活動において、特に大きな成果は以下の四つである。

一つ目は、イベントの総来場者数が1,152人と、目標とした300人を大きく上回り、昨年度の結果を超えることができたことだ。最大の要因は、栃尾地区の様々な地域おこし団体が総動員で企画された祭典「栃尾縁日」と共同開催できたことだ。「栃尾縁日」は、栃尾地区の様々な伝統行事の集合体であり、そこに参加させてもらうことで、自分たちが単体で開催するのに比べて遙かに多くの集客が得られた。

二つ目は、「栃尾縁日」での協働で、栃尾の地域おこしに取り組む人々との連携が拡大され、交流を深化できたことだ。栃尾地域の多様な方々との交流が深まり、今後の私たちの栃尾地区における地域活性化活動の土台が築けた。

三つ目は、活動資金として公的な補助金等の外部資金を活用できたことだ。補助金申請は私たちにとって初めての経験で、獲得までの道は平坦ではなかった。申請書類の作成、審査会でのプレゼンテーションを乗り越え、補助金15万7,000円を見事獲得できた。また、栃尾地区の皆様から5万円分の協賛金も頂け、さらにはイベント期間中に会場受付で募金をお願いした結果、ご来場者から2万3,343円を募金頂けた。こうした外部資金調達の成功体験は、今後の地域活性化活動において予算制約を打破する可能性を示したと思う。

四つ目の成果は、NST様が私たち取材し放映下さったことだ。9月以降3回にわたり取材し撮影して下さい、その編集動画を11月9日の報道番組「ニュースタッチ」で放映下さった。長岡大学では、すでにこの動画をオープンキャンパス等の入試広報や大学見学で活用して下さっている。地域の多くの中高生が「地域活性化プログラム」の素晴らしさを知る機会となり、地域活性化活動の裾野拡大に寄与するのではないだろうか。

16.3 反省点

他方で、今年度の活動で反省点が五つある。

一つ目は、取り組み効果の把握が抜けた点である。布の森の展示イベントには予想以上に多くの来場者があった。概ね成功だったと言える。しかし、それがどの程度、杜々の森、錦鯉、栃尾繊維などの地域資源のPRにつながったか、特に「杜々の森に行ってみよう」という気持ちを高めることができたのか、その効果の客観的な把握がされていない。後から振り返るに、これは非常にもったいないことだ。せめて、来場者アンケートの実施が必要だったと思われる。来年度以降は、取組の目的に照らして、その効果に関するデータ把握の視点を忘れずに取り組んでいきたい。

二つ目は、スケジュール管理の難しさである。今回のイベントでは直前の準備から後片付けまでの期間についてシフト表が作成され、取組内容を細分化して役割分担を定めて効率的な活動が目指された。それでも、開催直前の会場準備作業では一部のメンバーに仕事

が集中してしまい、夜中の2時まで準備をしてくれたメンバーもいた。

会場準備作業にかかる時間が想定以上で、準備期間の後半に、作業負担がしわ寄せされてしまったのが直接の原因である。未経験の分野の作業だったことから、やってみないとわからないことが多く、必要とされる作業の量を事前に全員が共有することは難しかった。来年度は、この経験も活かして、事前に慎重に綿密な計画作りを心がけていきたい。

三つ目は、展示期間中の人員配置についてである。「栃尾縁日」期間中となったイベント初日と二日目の両日に来場者が集中したが、人員が少なく受付での対応が滞ってしまった。きめ細かい来場者数予測を踏まえた人員配置の重要性を学んだ。

四つ目は、完璧な広報に至らなかった点である。特に課題になったのは、SNSでの広報関連である。SNSの魅力向上に向けて、投稿頻度が不十分だった。この原因の一つとして、メンバーで投稿日を分担していたが、各個人の判断では投稿内容の検討が難しく、投稿を躊躇する状況が多かったと思われる点が考えられる。投稿内容の確認作業がゼミで制度化されれば、ある程度改善できるかもしれない。また、素晴らしいチラシが作成できたものの、作成から配布までの段取りがずれ込んで、全体的にタイミングが遅れてしまった。来年度は、広報に対する全体的な意識向上とともに、広報作業の優先度を上げて、より早い段階から全員で取り組む体制が必要だと思われる。

五つ目は、錦鯉の提供のご依頼が遅くなってしまったことだ。私たちのイベント開催が錦鯉品評会シーズンである最繁忙期と重なった上に、最終的なご依頼内容をお伝えするのが遅くなり、長岡錦鯉養殖組合様にはご迷惑とご負担をお掛けしてしまった。来年度に同様のイベントを行う際には、もっと早い時期から相談してゆとりを持って計画的にご対応いただけるよう、前倒しで活動すべきである。

〔図表 57〕 成果発表会での発表（2021/12/4）



また、成果発表会でのプレゼンテーションの準備や体制も次年度は再検討したい。今年度は、アドバイザーの助言により発表者を二人に絞り、事前準備をしっかり行うことで発表の質が上がった。他方で、ただパネルを持つだけの人が出てしまい、もったいないとも感じられた。来年度以降は、よりインパクトのある発表を目指したい。

16.4 来年度の活動に向けて

以上のとおり、反省点がいくつかあったものの、目標とした栃尾地区の交流人口増加の土台作りに一定の寄与ができたのではないかと考える。定量的な効果は把握できなかったが、イベントへの総来場者数から見て「杜々の森」のPRはある程度できたと思う。

来年度の取り組みについては、まだメンバー全体で十分議論できていないが、今年度前半のゼミにおける議論で出されたアイデアなどをもとに、以下に2つの案を整理した。次年度の検討につないでいきたい。

〔アクアリウム第三弾〕

今年度大変お世話になった長岡錦鯉養殖組合様や栃尾織物工業組合様、ご来場者等の意見を参考にして、イベントを改善して実施する。杜々の森に続いて新たな題材をもとにしたアクアリウムを企画し、栃尾地区の他のイベントとコラボして、これまでの発展型のイベントが開催できるのではないだろうか。また、栃尾高校との協力体制をより密にすることで、多様な発想を形にできるかもしれない。

〔新たな事業の展開〕

今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、密防止などの点で大きな制約を受けた。来年度以降新型コロナウイルスが落ち着いた場合には、新事業が可能かもしれない。ゼミでは初期の頃の議論で、栃尾の特産物を使った「飲食店」や栃尾繊維を用いた「商品開発」などの案が出ていた。これらの案を一層詰めて、実現を検討してはいかがだろうか。

16.5 終わりに

今年度の私たちの活動は、昨年度に引き続き錦鯉を扱った点などでは、ノウハウが多少あった。しかし、杜々の森に焦点を当てた点、栃尾繊維とのコラボ事業だった点など、新たな取り組みの側面も加わって、昨年度よりも発展させた活動を進めねばならないという前向きなプレッシャーもあったように思う。

長岡市錦鯉養殖組合様、栃尾織物工業組合様を始め、地域の方々から多大なご支援を頂き、このプレッシャーを力に変えて、より良いイベントを運営できたのではないだろうか。イベントの総来場者数が、昨年度の150人に対して、今年度は1,152人にまで伸ばせたことに対して、大きな成果として素直に喜びたいと思う。

とはいえ、上記のとおり、今年度のイベントが完璧だったわけではない。来年度以降は、今回出た反省点を改善にいかし、あらためて地域の方々からご指導いただいて、より良い活動にしたい。また、私たちの活動が、全国の中山間地域の活性化に向けた活動の成功例として、注目いただけるよう励みたい。

(執筆担当) 星野 宇宙

長岡大学 学生による地域活性化プログラム 各プロジェクト報告書

1. 栃尾地区活性化に向けたにぎわい創出事業：にぎわい創出プロジェクト
～布の森 in 白屋堂堂～
石川英樹ゼミナール（1）
2. クイズラリー開催、SNS による栃尾PR
石川英樹ゼミナール（2）
3. 十分杯を世界に知らせよう！—動画制作を通して—
権 五景ゼミナール
4. きもの文化村構想の試み
～十日町地域における新たな可能性～
喬 雪氷ゼミナール
5. オープンファクトリーで長岡を活性化！
栗井英大ゼミナール
6. グラスルーツグローバル化—
—草の根・地域からの人類一体化の推進—
広田秀樹ゼミナール
7. 小学生のプログラミング教育を通じた地域活性化活動
高島幸成ゼミナール
8. 主体性を礎にした、ネットに頼らない情報の収集と課題の探索
武本隆行ゼミナール
9. デジタル・情報技術を活用した地域の財・サービスの情報発信
坂井一貴ゼミナール
10. コロナ禍における「まちの駅」の新たな交流・連携のあり方を考える
鯉江康正ゼミナール
11. 長岡市摂田屋の魅力高め、観光客を増やし、地域活性化を図る
～イベントプロジェクト～
生島義英ゼミナール（1）
12. 長岡市摂田屋の魅力高め、観光客を増やし、地域活性化を図る
～情報発信プロジェクト～
生島義英ゼミナール（2）

令和3年度 学生による地域活性化プログラム 石川英樹ゼミナール活動報告書

【発行日】 令和4年3月30日

【発行人】 村山 光博

【発行】 長岡大学

〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8

T E L 0258-39-1600（代）

F A X 0258-33-8792

<https://www.nagaokauniv.ac.jp/>